
魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆StrikerS☆

kkk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDERS☆Striker☆

【Nコード】

N2384K

【作者名】

kkk

【あらすじ】

PT事件、闇の書事件

それらを三人の少女によって解決することができた。

そして……あらたな物語が再び始まる。

それはかつて地球を守りとおしたスーパー戦隊と仮面ライダーである。

これはそんなエース達とスーパー戦隊達と仮面ライダーの新たな物語である。

魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆Strike
er☆ 始まります。

ブログ「KKKスタジアム」<http://blogs.yahoo.co.jp/kazuol10202003>

登場作品（随時更新）（前書き）

初めてなのでよろしくお願いします。

登場作品（随時更新）

登場作品

魔法少女リリカルなのはStrikers
らき☆すた

魔法先生ネギま！

百獣戦隊ガオレンジャー

忍風戦隊ハリケンジャー

爆竜戦隊アバレンジャー

特捜戦隊デカレンジャー

魔法戦隊マジレンジャー

轟轟戦隊ボウケンジャー

獣拳戦隊ゲキレンジャー

炎神戦隊ゴーオンジャー

侍戦隊シンケンジャー

天装戦隊ゴセイジャー

仮面ライダーBLACK

仮面ライダーBLACK
RX

仮面ライダークウガ

仮面ライダーアギト

仮面ライダー龍騎

仮面ライダー555

仮面ライダー剣

仮面ライダー響鬼

仮面ライダーカブト

仮面ライダー電王

仮面ライダーキバ

仮面ライダーディケイド

仮面ライダーW

超星艦隊セイザーX

大怪獣バトルシリーズ

ストライクウィッチーズ

登場作品（随時更新）（後書き）

登場させたいアニメ、特撮作品を募集します。知っている限り登場させますので楽しみにしていってください。

第一話「空の翼へ」(前書き)

とりあえず今回からスタートします。あといろいろと話の設定も変わる予定になります。ガジェットが相手だけではなくイマジンやフアンガイアといった仮面ライダーやスーパー戦隊に出てくる怪人達も出す予定です。

第一話「空の翼へ」

スバル「小さい頃の私は、本当に弱くて泣き虫で、悲しいこととか辛いことにいつも蹲って。ただ泣くことしか出来なくて……」
0071年4月29日ミッドチルダ臨海第8空港

ここでは大火災が起きていた。消防士たちも必死に消火に当たるが、相当苦戦していた。

消防隊員A「うわっ！ダメだ、ダメだ！こっちはダメだ！」

消防隊員B「この先に子供が取り残されているんだ！何とかならぬのか！」

消防隊員A「さっき、本局の魔導師とボウケンジャーとセイザーXと通りすがりの仮面ライダーが突入した！救助はその人達がしてくれる！」

そのころ炎の中では一人の少女が取り残されていた。少女はただ泣きづけるしかなかった。

スバル「お父さん、お姉ちゃん。キャーッ！」

倒れてきたものの風圧で飛ばされる

スバル「痛いよ！熱いよ！こんなの嫌だよ！帰りたいよ！」

今にも像が倒れそうだ

スバル「助けて、誰か助けて！」

像が倒れてきた

スバル「あっ！」

間一髪でなのは、ボウケンレッド、ライオセイザー、ディケイドが助けに来た。

なのは「よかった！間に合った！助けに来たよ！」

ボウケンレッド「なんとか間に合ったみたいだ。」

ライオセイザー「ああ、」

ディケイド「とりあえずその子の保護をしないと。」

像の倒壊を押さえスバルのところへ飛んでいく

なのは「よく頑張ったね、偉いよ」

ボウケンレッド「俺達が来たからにはもう大丈夫だ。」

ライオセイザー「だからもう泣かなくてもいいぞ。」

ディケイド「このあたりもやばくなってきたしな・・・」

スバル「うっ・・・うっ・・・」

なのは「もう大丈夫だからね。安全な場所まで一直線だから！」

ボウケンレッド「四人の武器で一気に」

ライオセイザー「脱出だ!!」

ディケイド「ああ!!」

四人はそれぞれの武器を構え、そして・・・

『ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディケイド!!』

なのは「ディバインバスター!!」

ボウケンレッド「デュアルクラッシャー!! ターゲットロック!! ゴー!!」

ライオセイザー「ライオフファイアー!!!!」

それぞれの必殺技で天井に穴をあけた。

そして後からやってきたライオキャリアーに乗って脱出した。

レミー「たっくん、なのはちゃん、暁さん、士さん。どうだった？」

ライオセイザー「大丈夫!!!! 救出した。」

ボウケンレッド「ああ、」

スタッフ「ありがとうございます。さすがは航空魔導師のエースオブエースと不滅の牙とセイザーXと通りすがりの仮面ライダーですね」

なのは「西側の救護隊に引き渡した後ですぐに救助活動を続行しますね」

ディケイド「まだ中に人がいるからな。」

スタッフ「お願いします!!」

スバル「炎の中から助け出してもらって、連れ出してもらった広い

夜空。冷たい風が優しく、抱きしめてくれる腕が暖かくて。助けてくれたあの人は強くて、優しく、かっこよくて。泣いてばかりで何も出来ない自分が情けなくて。私はあの時生まれて初めて心から思ったんだ。泣いてるだけなのも、何も出来ないのももう嫌だ
って」

そしてそれから四年後

0075年4月ミッドチルダ臨海第8空港近隣廃棄都市街

スバル（ナレーション）「強くなるんだって！」

スバルは張り切っているようだ

ティアナ「スバル、あんまり暴れてると試験中にそのオンボロローラがいつっちゃうわよ」

スバル「ティア、嫌なこと言わないで。ちゃんと油も差してきた」

リインがモニターに現れた

リイン「おはようございます。さて、魔導師試験の受験者さん2名、揃ってますか？」

スバル、ティアナ「はい！」

リイン「確認しますね。時空管理局陸士386部隊に所属のスバル・ナカジマ二等陸士と」

スバル「はい！」

リイン「ティアナ・ランスター二等陸士」

ティアナ「はい！」

リイン「所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないですね？」

スバル「はい！」

ティアナ「間違いありません！」

リイン「はい、本日の試験官を務めますのは私、リインフォース？空曹長です。よろしくですよ」

スバル、ティアナ「よろしくお願ひします！」

一方、それはゴーゴージャイロからフェイト、はやて、みゆき、海

東大樹、最上蒼太がそれを見ていた。

はやて「お、早速始まってるな。リインもちゃんと試験官してる」
みゆき「すっかり指揮官きどりですね。」

フェイト「はやて、みゆき、ドア全開だと危ないよ。モニターでも見られるんだから」

蒼太「そうそう。気をつけてね。」

大樹「これはなかなかの見所ありそうだけどね。」

はやて「はい」

みゆき「わかりました。」

そういうとドアを閉めたはやて。

フェイト「この二人がはやての見つけた子達だね。」

はやて「うん。二人共、中々伸び代がありそうなええ素材や。」

みゆき「はやてさんが選んだのでしたら間違いありませんね。」

蒼太「今日の試験の様子を見て、行けそうなら正式に引き抜き？」

はやて「直接の判断はなのはちゃんと暁さんとたつくと士君にお任せしてるけどな」

フェイト「そっか」

はやて「部隊に入ったらなのはちゃんの直接の部下で教え子になるわけやからな」

蒼太「チーフや拓人君にとっても部下になるかもしれないね。」

大樹「士にとってもいい部下になれそうだよ。」

なのはと暁と拓人と士は試験コースのセッティングをしていた。

レイジングハート「範囲内に生命反応。危険物の反応はありません。コースチェック終了です。」

なのは「うん。ありがとう、レイジングハート。関接用のサーチチャ―と障害用のオートスフィアも設置完了。」

拓人「なかなかいい人材だと思うぞ。」

暁「そうだな。このままボウケンジャーに入れてやりたいくらいだ。」

士「あの二人がなのは部下になったら悲惨かも知れんな。」

なのは「どういう意味なのかな、士君!! 笑いのツボ!!」

なのはは士の首筋に親指を突きつけた。

士「グッ!!・・・プッ・・・ハハハハハハハハハ!! 何しやがるんだ、なのは!!」

なのは「言ったとおりの意味だよ!! まったく・・・」

暁「それってはやてに教わったやつなのか？」

なのは「はい、フェイトちゃんやリンちゃんも覚えていますよ。」

士「ハハハ・・・なのは・・・覚えてるよ・・・!!」

拓人「まあとにかく始まりそうだぞ。」

すると連絡が入った。

良太郎「なのはちゃん、こっちは準備いいよ!!」

渡『僕も大丈夫です。』

なのは「ありがとう良太郎君、渡君!!」

士「今日はよろしく頼むな。」

良太郎『いいよ。』

渡『こちらもかまいませんけど、いいのでしょうか？新人の受験者を僕達なんかと戦わせちゃって。傲慢じゃないけど、大型スフィア何かよりずっと難易度高いと思いますけど。』

なのは「今の私達には、確実に戦力になる人間が必要なの。せめてライダーかスーパー戦隊一人と戦えるくらいの強さを持っていないと、意味が無いのよ。」

渡『わかりました。』

暁「ただし、クライマックスフォーム、ライナーフォーム、ドガバキフォーム、エンペラーフォームは使用禁止だ。俺達はともかくなのは達には勝てるかどうかかわからないフォームだからな。」

渡『わかりました。』

良太郎『気をつけます。』

そういうと二人は通信を切った。

暁「あの二人ならいけるかもしれんな。」

なのは「そうですね。私達は全体を見てようか？」
レイジングハート「イエス、マイマスター」

再び試験会場

リイン「二人はここからスタートして各所に設置されたポイントターゲットを破壊。」

リインは着々と説明をしていた。

リイン「あ、もちろん破壊しちゃダメなダメージターゲットもありますからね。妨害攻撃に気をつけて全てのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。何か質問は？」

スバル「えーっと・・・」

ティアナ「ありません！」

スバル「ありません！」

リイン「では、スタートまであと少し。ゴール地点で会いましょうですよ」

モニターが消えた。そしてシグナルがでてきた。それを見て身構える二人。

ティアナ「レディ・・・」

そしてスタートの文字が浮かび上がった。

スバル、ティアナ「Go！」

そして一気に駆けだした。

二人がスタートするのを確認したはやてとフェイトと蒼太とみゆきはやて「おっ、始まった、始まった」

フェイト「お手並み拝見っ」と

蒼太「そうだね。」

みゆき「あの二人、どんな結果を出せるか楽しみです。」

まず最初の関門にたどり着いた二人。ティアナはアンカーガンからワイヤーを発射する。

ティアナは廃墟にワイヤーを撃った

ティアナ「スバル！」

スバル「うん！」

二人は潜入前の打ち合わせをしていた

スバル「中のターゲットは私は潰してくる」

ティアナ「手早くね」

スバル「OK！」

ガラスを砕いてスバルが廃墟の中に潜入した

スバル「ロードカートリッジ！」

スバルは構えた

スバル「リボルバーシュート!!!!!!!!!!!!!!」

スバルはターゲットを順調に落としていった。

一方ティアナは別の廃ビルからターゲットを狙っていた。

ティアナ「落ち着いて、冷静に」

自分に言い聞かせて、みごとに命中することができた。

そして二人はターゲットを破壊しながら合流することができた。

スバル「いいタイム」

ティアナ「当然！」

一方ゴーゴージャイロでは

フェイト「いいコンビだね」

はやて「そやけど、難関はまだまだ続くよ。特にこれが出てくると
受験者の半分以上は脱落することになる最終関門やな。」

みゆき「良太郎さんや渡さんですね。」

フェイト「今の二人のスキルだと、クライマックスフォーム、ライ
ナーフォーム、ドガバキフォーム、エンペラーフォームは無理なら
・・」

はやて「バランス的にはモモタロスが憑依したソードフォームとキ
バフォームやな。」

みゆき「スピード重視でしたらウラタロスさんが憑依したロッドフ

オームと次狼さん及びガルルさんの力を借りたガルルフォームですね。」

蒼太「パワー重視ならキンタロスが憑依したアックスフォームと力及びドッグの力を借りたドッグフォームだね。」

フェイト「遠距離攻撃ならリュウタロスが憑依したガンフォームとラモン及びバッシュの力を借りたバッシュフォームだね。」

四人はそれをモニターで見ながらこう言った。

蒼太「これを倒したらネガティブとも互角に戦える可能性もあるからね。」

はやて「どうやって切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所や」

蒼太「チーフだったら一撃必殺だしね。」

はやて「たっくんもそうやしね。」

再び、地上では

スバル「行くぞ！」

ティアナ「スバル、うっさい！」

順調に落とし続けている二人であった。

続く

第一話「空の翼へ」(後書き)

次回

電王S「今日は本気で行くぜ!!!」

キバット「おっしゃー俺も本気を出すぜ!!!」

スバル「なのは・・・さん?・・・暁さん・・・拓人さん・・・士さん?」

なのは「また会えて嬉しいよ」

士「また会えたな。」

次回 第二話「果てなき冒険魂」

Wake up! 運命の鎖を解き放て!! (この辺りは毎回変わります。)

第二話「果てなき冒険魂」(前書き)

スバル「私があの人たちに助けてもらってから四年、ついに始まった私達の試練のとき・・・最初は順調かと思いきや・・・私達の前に立ちふさがる仮面の戦士・・・彼らはいったい・・・魔法少女リカルなのはRANGER☆RIDER☆StrikerS☆始まります。」

第二話「果てなき冒険魂」

二人は最初の関門をクリアすることができたのであった。

ティアナ「よし、全部クリア」

スバル「この先は？」

ティアナ「このまま上、上がったら最初に集中砲火がくるわ。オプティックファイルを使ってクロンシフトでスフィアを瞬殺！やるわよ！」

スバル「了解！」

二人はカートリッジを入れ替えるとそのまま進み始めた。

すると試験官から連絡があった。

ティアナ「はい？」

リイン「あっ言い忘れていたことがありました。この先の最終関門には二人の試験官がいます。その二人を撃退すればいいです。」

フェイト「なるほど。これは確かに伸び代がありそうだね」

はやて「そやろ」

蒼太「でも残りの最終関門が厄介だよ。」

みゆき「良太郎さんや渡さんも本気出すかもしれませんね」

すると良太郎と渡から連絡があった。

良太郎『こっちはいつでも準備いいよ。』

渡『まかせてください。』

そして、スバルとティアナは最終関門となる建物へとやってきた。

スバル「ティア、最終関門ってここかな？」

ティアナ「さっき試験官から連絡があったの。この先にいる二人の試験官に撃退すればクリアになるそうよ。」

すると二人の仮面の戦士がやってきた。

電王S「ようお前らが新人どもか？」

キバ「ここから先は僕達が最終関門だよ。」

スバル「嘘!!? 最終関門って仮面ライダーなの!!?」

ティアナ「これから戦う相手を考えれば間違いないね。」

電王S「言っとくが俺は本気で行くぜ!!!」

良太郎『モモタロス、これは試験だからね・・・』

電王S「わかってるよ!!! 手加減はしてやるが今日は本気という形で行くぜ!!!」

キバット「渡、こっちも本気で行くぜ!!!」

キバ「うん!!!」

スバル「行くよ、ティア!!!」

ティアナ「わかったわ!!!」

スバルとティアナは二人の仮面ライダーと戦い始めた。

士「はじまったみたいだな。」

なのは「そうだね。でも大丈夫なのかな?」

士「大丈夫に決まっているだろう・・・モモタロスが本気にならなきゃ別だが・・・」

なのは「ははは・・・」

電王S「おらおら、行くぜ、行くぜ、行くぜ!!!」

キバ「はああああ!!!」

スバル「うわああ!!!」

電王とキバの連続攻撃にスバルは苦戦していた。

ティアナ「スバル、今、助ける!!! シュート!!!!!!」

ティアナはアンカーガンで電王Sとキバに攻撃した。

電王S「うわあ!!! あぶねえだろうが!!!!!!」

キバ「でも、なかなかやるね。」

キバット「だったら銃には銃だぜ!!!」

キバは緑色のフェッスルを手に取るとキバットに吹かせた。
キバット「バッシャーマグナム!!!」

そのころキャッスルドランでは
ラモン「あっ、呼ばれた。」

次狼「どうやら渡のやつも本気を出しているみたいだ。」
力「行って……こい……」

ラモン「うん!!」

ラモンは彫像形態になると、そのまま発射された。

キバはバツシャーフォームに変身した。そして……
リュウタロス「もうモモタロスったらなにやってんの!!? 僕が行く!!」

電王S「おい小僧!!!!!!」
『ガンフォーム!!』

電王G「お前、倒すけどいいよね? 答えは聞かない!!」

電王もガンフォームとなった。

ティアナ「こっちも本気を出さない……」

ティアナも射撃を開始したが電王GとキバBの放った弾丸によって
かき消されるだけであった。

ティアナ「くっ、相打ちになってしまう。」

電王G「へへへ、やったー!!」

キバット「喜んでもいいけど、次が来るぜ!!!!」

そこへスバルが攻撃を仕掛けてきた。

スバル「うおおおおおおお!!!!!!」

しかし、キバはあわてる様子を見せずに、新たなフェッスルを取り
出すと、キバットに吹かせた。

キバット「ドツガハンマー!!」

そのころキャッスルドランでは
力「今度は……俺か……」

力は彫像形態になると、そのまま発射された。

キバはドッガフォームとなった。

電王G「あっー!!!自分ばかり変わってズルイ!!!」
キンタロス「なら交代や!!!」

『アックスフォーム!!!』

電王A「俺の強さは泣けるで!!!」

電王もアックスフォームに変わった。スバルは電王のボディに攻撃したが・・・

スバル「痛ッー!!!硬い体!!!」

電王A「そんなんでは俺は倒せへんで!!!うおりゃあああああ
ああ!!!」

電王Aはスバルを投げ飛ばし、

キバD「ふん!!!」

スバル「がつ!!!」

キバはドッガハンマーでスバルの胴体に殴りつけた。スバルは倒れた。ティアナも駆けつけた。

ティアナ「スバル、大丈夫?」

スバル「なんとか・・・」

ティアナ「こうなったら同時攻撃で行くわよ。」

スバル「うん!!!」

キバット「だったらこっちも・・・」

新たなフェッスルを取り出すと、キバットに吹かせた。

キバット「ガルルセイバー!!!」

そのころキャッスルドランでは

次狼「あの新人共、けっこうやるじゃねえか。」

次狼は彫像形態になると、そのまま発射された。

キバはガルルフォームとなった。

ウラタロス「次は僕が行ったほうがいいかな?」

電王A「すまん!!」

『ロッドフォーム!!』

電王R「君達、僕に釣られてみる？」

電王もロッドフォームとなった。

そして……

ティアナ「クロスファイアー……」

スバル「リボルバー……」

スバル、ティアナ「シュート！」

二人の必殺技が放たれた。

『フルチャージ!!』

『ガルルバイト!!』

電王RとキバGはそれぞれの必殺技の体制になった。そして……スバルとティアナの攻撃は電王Rの必殺技のデンライダーキックとキバGの必殺技のガルル・ハウリングスラッシュによってかき消されてしまった。そして二人に衝撃波が襲い掛かった。

スバル「うわああああああああああ!!!!!!」

ティアナ「きゃああああああああああ!!!!!!」

二人は吹き飛ばされてしまった。その際に監視用のサーチャーを破壊してしまった。

電王R「逃げた魚に深追いは禁止と……」

キバ「でも監視用のサーチャーまで壊しちゃったのはやりすぎたかな？」

一方、上空では

はやて「ん、何や？」

フェイト「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだったけど」

みゆき「何もなければいいけど？」

大樹「なんかあったみたいだね。」

蒼太「そのようだね。チーフ、聞こえますか？」

一方、なのは、暁、拓人、士は・・・
なのは「もう二人とも監視用のサーチャーまで壊すのはやりすぎだよ。」

士「あの二人に何かあったかも知れんな。」

なのは「リイン、一応様子を見に行くね」

リイン「はいです。お願いします」

レイジングハート「Am I set up？」

なのは「そうだね。念のためお願い」

レイジングハート「Alright, Barrier Jacke
t standing up」

なのははバリアジャケットを装着して、現場に向かった。

暁「俺達も行くぞ!!」

拓人「ああ、」

士「仕方ないな。」

暁はアクセルラーをセットし、拓人もナックルクロスを装備し、士もディケイドライバーをセットした。

暁「レディー！ボウケンジャー！！スタートアップ！！」

拓人「ナックルクロス！ X、装着！！」

士「変身！！」

『カメンライド・ディケイド！！』

三人は変身して現場に向かった。

一方、試験会場では

スバル「ティア！！大丈夫！！？」

ティアナ「なんとかね・・・でもさっきので足をやられたわ。」

スバル「そんな！！？ティア、ごめん。油断してた」

ティアナ「私の不注意よ。あんたに謝られると、かえってムカつくわ。走るのは無理そうね。最終関門は抜けられない」

スバル「ティア・・・」

ティアナ「私が離れた位置からサポートするわ。そしたら、あんた

一人ならゴールできるわ」

スバル「ティア！」

スバルは反論しようとしたが・・・

ティアナ「うっさい！次の受験の時は私一人で受けるっつつてんのよ！」

ティアナはそれを許さなかった。

スバル「次って半年後だよ！」

ティアナ「迷惑な足手まといがいなくなれば、私はその方が気楽なのよ！分かったらさっさと・・・くっ・・・ほら、早く！」

スバル「ティア、あたし、前に言ったよね。弱くて情けなくて誰かに助けてもらいっぱなしな自分が嫌だったから管理局の陸士部隊に入った」

ティアナ「あっ・・・」

スバル「魔導師を目指して、魔法をシューティングアーツを習って人助けの仕事に就いた」

ティアナ「知ってるわよ。聞きたくも無いのに何度も聞かされたんだから」

スバル「ティアとはずっとコンビだったからティアがどんな夢を見てるか。魔導師ランクのアップと昇進にどれくらい一生懸命かもよく知ってる！だから、こんなところで、私の目の前でティアの夢をちよつとでも躓かせるのなんて嫌だ！一人で行くのなんて絶対に嫌だ！」

ティアナ「じゃあ、どうすんのよ！走れないバックスを抱えて、残りちよつとの時間でどうやってゴールするのよ！」

スバル「裏技。反則取られちゃうかもしれないしちゃんとできるかも分からないけど。上手くいけは二人でゴールできる！」

ティアナ「・・・本当？」

スバル「あ、その、ちよつと難しいかもなんだけどティアにもちよつと無理してもらうことになるし、よく考えるとやっぱり無茶っばくはあるし・・・」

ティアナ「・・・（怒）」

スバル「あの、何ていうかティアがよければ・・・」

ティアナ「あーっ、イライラする！」

スバル「えー!!？」

ティアナ「ぐちぐち言ってもどうせあんたは自分のわがままを通すんでしょ？ どうせ私はあんたのわがままにつきあわされるんでしょ？ だったら、はっきり言いなさいよ！」

スバル「二人でやればきつと出来る。信じて、ティア」

ティアナ「残り時間3分40秒。プランは？」

スバル「うん!!！」

そして、二人の作戦は展開された。

一方、その様子を見たのはボウケンレッドとディケイドであった。ボウケンレッド「まったく・・・。怪我したパートナーを無理やり連れていくことは残念ながら減点だ。・・・しかし、あそこで仲間を見捨てるなら俺なら即落第だな。」

ディケイド「お前ならそういうと思ったぜ。」

そのころ建物内では電王とキバが待っていた。

キバ「あの二人、まさかリタイヤするんじゃ・・・」

電王S「それならそれでここまでというわけだ!!」

すると入り口からティアナが現れた。

電王S「現れたようだぜ!!！」

電王Sはデンガッシャーを構えるとティアナを攻撃した。

はやて「あ、直撃？」

フェイト「ううん、違う」

蒼太「あれは・・・」

大樹「偽者ということか・・・」

試験会場……

攻撃したはずのティアナが突然消えた。

電王S「何!!!!!!?」

キバ「これは……」

すると周りにたくさんティアナが現れた。

電王S「どうなってるんだよ!!!!!!」

キバ「とにかく攻撃するだけ……」

電王とキバは幻のティアナを攻撃し始めた。

はやて「高速回避? いや、ちゃうな」

フェイト「あの子、ティアナは囧」

蒼太「今まで出てきた彼女は幻なんだよ。」

はやて「と言うことは」

蒼太の言う通り、電王とキバが戦っていたティアナはすべて幻だった

ティアナ「フェイクシルエツト。これ滅茶苦茶魔力くうのよ。あんまり長くもたないんだから一撃で決めなさいよ。でないと、二人で落第なんだから」

スバル「うん!」

スバルは何か考え事をしていた

スバル「私は空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃も無い。出来るのは全力で走ることとクロスレンジの一発だけ。だけど決めたんだ! あの人達みたいに強くなるって! 誰かを、何かを守る自分になるって! ウィングロード!」

そういうと、ウィングロードが出てきた。

ティアナ「行って!」

ティアナの声と共に、リボルバーナックルにカートリッジとロードさせるスバル。

スバル「いいいくぞおおおー!!!!!!」1

そして、再び叫びと共に、自身が作り出した道……『ウィングロード』の上を、電王とキバのいる廃ビル目掛けて突撃した!!

建物内

電王S「何!?!」

キバット「来たか!?!」

スバルは二人に攻撃を仕掛けてきた。

電王S「そういうことなら・・・」

『フルチャージ!!』

電王S「こっちも本気で行くぜ!!!!!!!!!! 必殺・俺の必殺技!!!!!!!!!!
パート0!!!!!!!!!!」

キバット「こっちもキバって行くぜ!!!!!!!!!! ウェイクアップ!!!!!!!!!!」

電王とキバも必殺技を繰り出した。

スバル「でやあああああー!?!」

お互いの必殺技がぶつかり合っていく。

スバル「うおおおおおー!?!」

電王S「うおおおおおー!?!」

キバ「はあああああああああああああああああ!?!」

お互いに一步も引かなかった。

スバル「うおおおおおー!?!」

そして、スバルは構わず、ドンドン押し込み、更にカートリッジを
ロードさせる。

そして・・・

スバル「いやあああああー!?!」

そして、二人の必殺技を打ち破った。

電王S「何、俺の必殺技が破られた!?!」

スバル「まだまだあああああああああ!?!」

キバット「おい!?! もういいって!?!」

スバルは足元に魔法陣を展開させる!そして、ここへ来て更にカー

ライオセイザー「なんか嫌な予感を感じてきた。」

こなた「実は私も・・・」

ティアナ「ちよつとスバル、止まる時のこと考えてるんでしょぅね？」

スバル「え？・・・あ！！！」

考えていなかった。

ティアナ「嘘！！？」

リイン「あ、何かちよいやばです」

こなた「あのようなタイプは止まることを忘れることが多いよね。」

スバル、ティアナ「わーっ！」

二人はゴールするが止まらない。

ライオセイザー「仕方ない！！G2！！コスモカプセル・スワン6！！！」

そういうと、ライオセイザーはライオブレイカーにスワン6をセツトした。

ライオセイザー「スワンフラップ！！」

そのまま、白鳥のビジョンに合わせて、高速移動で二人を止めようとするライオセイザーであったが・・・

スバル「その人、どいて！！」

ライオセイザー「うおおおおおおおおおおおおおお！！！！だめか！！！！」

とめられなかった。そのまま、三人は瓦礫にぶつかりそうになった。なのは「うん、アクティブガード。ホールディングネットもかな？」

レイジングハート「Active Guard with Holding Net」

フェイトとはやてもヘリの上から魔法を使っていた

すると桜色の多数の魔法陣から発生している同色のネットに引っ掛かっているスバルと、白色の魔法陣から発生している同色のクツシヨンの様な物に乗っかっているティアナと尻餅をついているライオセイザーの姿があった。

リイン「もう！二人共、危険行為で減点です！」

そんな三人の前に、怒り心頭のリインが現れた。

リイン「頑張るのはいいですが、怪我をしては元も子もないですよ！そんなんじゃ魔導師としてはダメダメです！拓人さんも止められるような状況を考えてください！！！」

ライオセイザー「そんなこと言うなよ。ちびすけ……」

リイン「ちびすけはよけいです！！」

こなた「小さいのにがんばってるね。リイン」

リイン「こなちゃんだけには言われたくありません！！！！ まったくもう！」

なのは「まあ、まあ」

リイン「ん？」

そんな三人の前に現れたのはなのはとボウケンレッドとデイケイドであった。

なのは「ちよつとびっくりしたけど、無事でよかった」

ボウケンレッド「ああそうだな。」

なのは「とりあえず試験は終了ね。お疲れ様」

デイケイド「怪我はなくてよかったな。」

ガードの類を解く

なのは「リインもお疲れ様。ちゃんと試験官できてたよ」

ボウケンレッド「グッジョブだぞ！！リイン！！」

デイケイド「これからがんばれよ。」

リイン「わーい！ありがとうございます、なのはさんに明石さんに士さん！！」

三人は変身を解く。ライオセイザーも変身を説いた。

なのは「まあ、細かいことは後回しにして。ランスター二等陸士ティアナ「あ、はい」

なのは「怪我は足だね。治療するからブーツ脱いで」

リイン「あ、治療なら私がやるですよ」

ティアナ「あ、えっと、すみません」

スバル「なのは……さん?……暁さん……拓人さん……
士さん?」

なのは「ん?」

暁「なんだ?」

拓人「俺になんかようか?」

士「どうしたんだ?」

スバル「あ、いえ、あの、高町教導官、一等空尉に明石チーフに安藤艦長に門矢さん!!」

なのは「なのはさんでいいよ。みんなそう呼ぶから4年ぶりかな。背伸びたね、スバル」

暁「俺も暁でいいぞ!! 大きくなったなスバル!!」

拓人「俺も拓人でいいぞ!! それにしても久しぶりだな!! スバル
!!」

士「俺も士でいいぞ!!!! 頑張っているみたいだな、スバル。」

スバル「えっと、あの」

なのは「また会えて嬉しいよ」

暁「これからもよろしくな!!」

拓人「ああ!!」

スバルは泣き出す

士「おいおい泣くなよ。」

はやて「さて、なのはちゃんと暁とたつくと士君的に二人はどやろ? 合格かな?」

フェイト「フフフ、どうだろうね?」

大樹「きつといい答えになるかもよ。」

続く

第二話「果てなき冒険魂」(後書き)

次回

はやて「あんな、みんな……私、やっぱり自分の部隊を持ちたいんよ」
ユウスケ「俺、皆の笑顔を守りたいんだ!!」

総司「お祖母ちゃんは言っていた。困っている人がいたら力になるようにと・・・」

良太郎「僕も一緒に協力するよ。」

次回 第三話「機動六課く始まりは四年前」

天の道を往き、総てを司る！

第三話「機動六課」始まりは四年前」(前書き)

スバル「憧れていたのは私の命を救ってくれた人たち。四年越しの再会は突然すぎて、わからなかったけれど・・・ここから何かが始まる気がする・・・魔法少女リリカルなのはRANGE
R S ☆ R I D E R ☆ S t r i k e r S ☆ 始まります。」

第三話「機動六課」始まりは四年前

スバル「……………ぐすっ……………ぐすっ……………！」

なのは「私のこと……………覚えててくれたんだ……………」

暁「俺のことも覚えているみたいだな。」

拓人「ああ、間違いなくあの子だよ。」

士「あの時、俺達が助けた少女だな。」

なのはの胸に顔をうずめたまま、ただひたすらに泣きじゃくるスバル——彼女の頭を撫でてやり、四人は優しくそう告げる。

スバル「あの、覚えてるって言うか……………あたし、ずっと、なのはさんと暁さんと拓人さんと士さんに、あこがれて……………」

なのは「そうなんだ……………嬉しいな」

暁「しかしいつまでも泣いていないで顔あげたらどうだ？」

拓人「君は笑顔の方が似合っているよ。」

士「あいつもそういうぜ。」

泣きながらのその言葉になのはと暁と拓人と士が答え——ようやく顔を上げたスバルに、笑いながら続ける。

なのは「バスター見て、ちよつとビックリしたよ」

暁「そうだな。上達するなんてすごいな。」

スバル「え……………ああああ……………！！！！す、すみませんっ！

！勝手に、マネしちゃって！」

暁「気にすることもないぞ。これも君の冒険だ……………」

なのは「えええ、暁さんのいうとおりよ。いいよ、そんなの」

拓人「俺のライオフアイアーも上達させてあげようか？」

士「でも後が怖いぞ……………ってなのは、その笑いのツボは辞めてくれよ……………」

スバル「ありがとうございます……………！」

そんな五人のやりとりをフェイトとはやて、みゆき、大樹、蒼太は見ていた。

フェイト「知り合いなの？」

はやて「ほら、アレやよ。4年前の、みんなが、私の演習先に遊びに来てくれた時の空港火災」

フェイト「あ……ひょっとして、災害救助の手伝いをボウケンジャーとセイザーXと仮面ライダー達とした時の？」

蒼太「ああ、そういうことだね。」

はやて「そう……スバルはなのはちゃんと暁さんとたつくと士君が助けた要救助者のひとり。ちなみに、フェイトちゃんとさくらさんと高丘さんと大樹君はお姉ちゃんを助けてるんよ。」

蒼太「ああ、さくらさんも一緒だね。」

フェイト「そう？ 女の子を助けたのは、よく覚えてるけど……」

大樹「もしかして……」

はやて「その子で間違いないと思うんよ。今は姉妹二人そろって管理局員。部隊は別なんやけどね」

そして……話は四年前に戻る

四年前の空港大火災。この大火災の原因は、空港に密輸されていたある危険物……『ロストログア』によって引き起こされたものだった。火災の勢いは凄まじく、災害救助隊だけでなく、近隣の陸上部隊・航空部隊までもが召集されるほどだった。

魔導士「203、405、東側に展開してください！魔導師陣で防壁張って、燃料タンクの防御を！」

はやては指揮車の上にいた。

リイン「ダメです、はやてちゃん、シャーク隊長！！まるっきり人手が足りないですよー！」

はやて「そやけど……首都からの航空支援が来るまで、今の人員で持ちこたえるしかないんよ」

シャーク「とにかく被害を最小限に抑えるようにしろ！！」

リイン「はい」

弱音を吐くリインを激励しながら、必死に指揮を執るはやてとシャ

ーク。

陸士部隊で指揮官研修を行っていた彼女は、担当の指揮官が来るまで、前線指揮で作戦に参加していた。そして、休暇を利用して、はやての所へ来ていたフェイトとなのはも、救助に参加。更にボウケンジャーとセイザーXと仮面ライダー達も救助していた。はやての頭上を通過して、燃え盛る空港へと向かって行くフェイトとボウケンピンクと仮面ライダーディエンド。

魔導士「航空魔導師、“本局02”、応答願います」

フェイト「はい、“本局02”——テストロッサ・ハラオウン」

ボウケンピンク「同じく、ボウケンジャー05・ボウケンピンク！」
ディエンド「同じく、仮面ライダーディエンド。」

魔導士「8番ゲート付近に、要救助者の反応が出たんですが、局員が進めないんです。お願いできますか？」

ボウケンピンク「わかりました。すぐに向かいます。フェイト、大樹君——！」

フェイト「了解——！」

ディエンド「いいよ。」

三人は早速、向かった。

一方、はやてのいる指揮所では——

リイン「はやてちゃん、シャーク隊長！応援部隊の指揮官さんとSPD、到着です！」

はやて「うん——！」

自分のとなりでその知らせを受けたリインの言葉にうなずくと、はやては指揮車から降りて駆けつけてきた部隊の指揮官へと向き直り——

ゲンヤ「すまん——！遅くなった。」

ドギー「こちらにも到着した。」

するとシャークが・・・

シャーク「久しぶりだな——！ゲンヤ——！」

ゲンヤ「ああ、そっちも元気そうだな。シャーク!!」

はやて「知り合いなんですか？」

シャーク「ああ、昔のな・それよりはやて!!」

はやて「あ!! いえ……陸士部隊で研修中の本局特別捜査官、八神はやて一等陸尉です。臨時で応援部隊の指揮を任されています!!」

ゲンヤ「陸上警備隊108部隊の、ゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

ドギー「SPD・ミッドチルダ署長・ドギー・クルーガーだ。」

はやて「では……ナカジマ三佐、ドギー署長。部隊指揮をお願いしてもよろしいでしょうか？」

シャーク「俺も行く!!」

ドギー「俺もだ。」

ゲンヤ「ん?……ああ、お前さんも魔導師だったっけか。それにシヤークもセイザーXでドギーもデカレンジャーだったな。」

シャーク「ああ!!」

ドギー「そうだ。」

すると通信が入った。

ドギー「俺だ。皆は空港に残っている人民の救助を頼む。俺もそっちに向かう。」

デカレンジャー『ロジャー!!』

はやて「はい、広域型なんです。空から消火の手伝いを——」

そうはやてが言いかけた、その時——

なのは（はやてちゃん!）

そんなときには達から通信が届いた。

ボウケンレッド（指示のあった女の子ひとり、無事救出! 名前はスバル・ナカジマ。さっき、無事に救護隊に渡した。）

ライオセイザー（だけど中にお姉ちゃんがいるみたいなんだ!!）

ディケイド（それになんかワームも現れているらしいぞ!!）

シャーク「わかった!! 俺とはやてもすぐに向かう!!」

そして、通信を切った。

リイン「ナカジマ……」

はやて「え!?!」

ゲンヤ「ああ。うちのガキどもだ。」

シャーク「そうか……」

はやて「そうですか……ではナカジマ三佐、後の指揮をお願いします。リインは三佐への申し送りをお願い。説明が終わったら、上で私と合流や」

リイン「はいです!!」

リインの答えにうなずき――すぐにはやてはきびすを返し、空港に向けて駆け出した。そのままバリジャケットを装着し……

シャーク「シャークナックル!!! X!!! 装着!!!!」

シャークもシャークセイザーに変身して、シャークリーガーに乗り込んだ。

はやては夜空へと飛び立つ。上から見るとまだかなりの範囲が燃えているのがわかるが――

はやて「それでも……私なら……!」

こういう時のための広域型だ。自分自身に気合を入れ、はやては最適な消火ポイントを探して移動を開始した。

そのころ、カブトとガタックは大量のワーム（蛹）とワーム（成虫）と戦っていた。

ガタック「フェイトちゃん達を行かせたのはいいけど……このままではどうするんだ? 天道?」

カブト「お祖母ちゃんは言っていた。あきらめるのは全力でやってからだと……」

ガタック「お前ならそういうと思っていた。」

そして……

カブト、ガタック「『クロックアップ!!!!!!』」

『クロックアップ』

二人はクロックアップ状態になり、ワーム・蛹態を攻撃した。そし

て・・・ワーム・成虫態は襲い掛かるが、二人はあわてずにそれぞれのゼクターのフルスロットルを押した。

『1・・・2・・・3』

カブト「ライダーキック!!!」

ガタック「ライダーキック!!!」

『ライダーキック!!!』

それぞれのライダーキックが決まり、ワーム達を倒した。

ギンガ「スバルー?スバル、どこなの!?!」

西側区画の一角――吹き抜けの回廊を、ギンガ・ナカジマは妹の姿を探していた。すでに回廊内に人の気配はない。他を探そうとギンガはきびすを返し、フェイトとボウケンピンクとディエンドが回廊に到着したのは、ちょうどそんな時だった。

ボウケンピンク「いました。あの子です!!!」

フェイト「その子!!!じっとして!!!」

ディエンド「今すぐに助けに行くからね。」

ディエンドの声に、ギンガが彼女に気づく――が、まるでそれを合図にしたかのように、ギンガの足元が崩落する!ギンガの身体が宙に投げ出された。

ギンガ「きゃああああああああああああ!!!」

フェイト「だめ!!!今、向かって間合わない!!!」

その時、壁が崩れ、そこからロボットの腕が現れた。すかさずギンガを救いだした。

ボウケンシルバー「なんとか間に合ったみたいだな!!!」

フェイト「映士!!!」

ボウケンピンク「シルバー!!!タイミングがよかったです。」

それはボウケンシルバーが乗るサイレンビルダーのものであった。

ボウケンシルバー「フェイト!!!さくら姐さん!!!海東!!!こっちも全員の救助も完了だ!!!」

ボウケンピンク「さすがはボウケンシルバーですね。」

フェイト「ええ。」

ディエンド「とりあえず無事でよかった。」
するとギンガが……

ギンガ「あのロボットに乗っている人に聞きます。その救助者に妹がいますか？」

ボウケンシルバー「妹？名前は？」

ギンガ「スバル・ナカジマ……11歳です」

ボウケンシルバー「大丈夫だ！！その子ならなのはと明石と安藤が助け出した。」

ギンガ「そうなんですか……よかった……」

ボウケンシルバー「俺様はすぐに消火活動に戻るからな！！この子を頼むぜ！！」

ボウケンピンク「分かりました。」

フェイトとボウケンピンクとディエンドはギンガを連れてくと、そのまま飛びあがった。

ボウケンピンク「そういえば、君の名前は？」

ギンガ「あ、はい……ギンガ・ナカジマ、13歳。陸士候補生です」
ディエンド「陸士候補生ということは……」

ボウケンピンク「どうやらフェイト。未来の同僚ですね。」

フェイト「ええ！！」

ギンガ「そ、そんな……恐縮、です……」

そんな時、ワームが二人に襲い掛かろうとしていた。すると

デカマスター「Dソード・ベガ！！！！ベガスラッシュ！！！！！！」

デカマスターの攻撃ですべて倒された。

デカマスター「大丈夫か！！？」

フェイト「ドギー師匠、どうして……」

デカマスター「ワームが現れたと聞いていたからな、心配するな！！残りのワームは全て、天道やバンたちが倒した。お前達はその子を救出だ！！」

フェイト「わかりました！！」

三人は再び、動き始めた。

ゲンヤ「補給は!？」

リイン「後18分で、液剤補給車が7台到着します! 《首都航空部隊も、あと1時間以内には主力出動の予定だそうです!》」

指揮所で尋ねるゲンヤの問いに、リインは入ってくる連絡をテキパキとさばきながらそう答えた。

ゲンヤ「チッ、遅いな……! 救助者のほうは?」

リイン「そちらは、はやてちゃん達とボウケンジャーとセイザーXとの御蔭で、全員救出されたそうです。あとワームもデカレンジャーや仮面ライダー達のおかげで駆除できました。」

ゲンヤ「最悪の事態は避けたみたいだな。」

そして空港上空では

はやて「ほの白き雪の王、銀の翼もて、眼下の大地を、白銀に染めよ!」

はやては足元に魔法陣を展開。詠唱を行い、周囲に氷結の“力”を込めた4つの魔力スフィア——いや、箱状の魔力キューブを生み出す。

陸士部隊「八神一尉! 指定ブロックの避難、完了しました!」

陸士部隊「おねがいします!」

はやて「了解!」

眼下の魔導師達の言葉に従い、はやてはシュベルトクロイツを振りかぶり——

はやて「来よ、氷結の息吹! アーテム・デス・アイセス!……!」

はやてが魔法を解放すると同時——魔力キューブが放たれた。眼下の火災現場に降り注ぎ、それぞれの着弾地点を中心に冷気を開放。

瞬く間に炎を打ち消し、凍結させていく!

はやて「よし! シャーク隊長!! 高丘さん!!」

シャーク「ハイドロブリザード!!!!」

ボウケンシルバー「ダブルウォーターシュート!!!!!!」

流星神シャークリーガーのソードプレッシャーから冷凍光線を、サイレンビルダーのウォーターシュートによって、火災は完全に防いだ。すると空から応援部隊がやってきた。

首都航空部隊「遅くなつてすまない！現地の諸君と、臨時協力のエース達、それからボウケンジャーとセイザーXと仮面ライダー達に感謝する！後はこちらに任せてくれ！」

はやて「了解しました！引き続き協力が続けますので、指示をお願いします！」

後日

アナウンサー「おはようございます。さっそく、現場を呼んでみましょう」

リポーター「はい、こちら現場です。火災は現在、鎮火しています。が、煙は、未だに立ち上っている状態です。なお、現在は時空管理局の局員によって、危険の調査と、事故原因の解明が進められます。幸いにも、迅速に出動した本局航空魔導師隊の活躍もあり、民間人に死者は出ておりません」

はやて「うーん……」

翌朝――テレビのニュースが火災のことを伝えるのを、はやてはベツドの上で横になったまま複雑な表情で聞いていた。

はやて「やっぱりなあ……」

なのは「……………？何が『やっぱり』なの？」

はやて「実際に働いたんは、災害担当と初動の陸士部隊と、なのはちゃんとフェイトちゃん。それからボウケンジャーとセイザーXと仮面ライダーとSPDの人たちやないか。」

なのは「まあ、お休み中だったしね」

フェイト「それに、民間の人達も無事だったんだし」

はやて「あんな、みんな……私、やっぱ自分の部隊を持ちたいんよ」
なのは、フェイト「うん？」

はやて「今回みたいな災害救助はもちろん、犯罪対策も、発見されたロストログアの対策も……何につけ、ミッドチルダ地上の管理局部隊は行動が遅すぎる。後手に回って正面ばかりの動きじゃあかんし、私も今みたい、フリーで呼ばれてはあっちこっち回ってたんじゃちつとも前に進めてる感じがせえへん。少数精鋭のエキスパート部隊——それで、成果を挙げてったら、上の方も、少しは変わるかもしれへん。でな……私がもし、そんな部隊を作ることになったら……フェイトちゃん、なのはちゃん。協力してくれへんかな？」その問いに、なのは達は再び顔を見合わせて——はやて「もちろん、3人の都合とか、進路とかあるんは、わかるんやけど……」

そんな彼女達に対し、はやてはあわてて弁明の声を上げるが——なのは「はやてちゃん、何を水臭い」

フェイト「小学3年生からの付き合いじゃない」

対し、なのはとフェイトは肩をすくめてそう答えた。

なのは「それに。そんな楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら、逆に怒るよ。ね、フェイトちゃん。」

フェイト「うん!!」

はやて「おおきにな。二人とも。」

するとそこへさくらとレミーが入ってきた。

さくら「もちろん私達サージェスも協力しますよ。はやて。」

レミー「セイザーXも協力するわ!!」

はやて「いいんですか?」

さくら「ええチーフもそういいましたので。」

レミー「シャーク隊長も同じ答えよ。」

はやてはうれしいような顔をして……

はやて「ありがとうございます。二人とも……」

更に……

ユウスケ「もちろん、俺達も協力するよ!!はやてちゃん!!」

士「ユウスケ!!!離せ!!!!!!」

士とユウスケと総司と良太郎まで現れた。

はやて「士君、ユウスケ君、天道さんまで・・・」

ユウスケ「話は聞いたよ。俺、皆の笑顔を守りたいんだ!! あの人との約束を果たしたいんだ!!」

ユウスケは前に起きたグロンギ事件で最愛の女性、八代藍を若くして亡くしておるので、彼女との最後の約束で笑顔を守ることを決意したのであった。

ユウスケ「もちろん俺だけじゃなくて士や天道さんたちもなんだ!!」

士「何をバカな!! 俺がいつ!!」

総司「士、そんなことをいうまでもないだろう。お祖母ちゃんは言っていた。困っている人がいたら力になるようにと・・・」

士「・・・くっ・・・分かったよ・・・」

良太郎「もちろん僕達も素晴らしき青空の会も協力するって!!」

はやて「ほんまに・・・ありがとうございます!!」

こうして、はやての自分の部隊を作ることができたのであった。

続く

第三話「機動六課」始まりは四年前」（後書き）

次回

スバル「あたしはなのはさんと暁さんと拓人さんと士さんにいろんなこと教わって、もっともっと強くになりたい。ティアは新しい部隊で経験積んで、自分の夢を、最短距離で追いかける！」

フェイト「まあ、私の隊だし……一緒になら、少しは安心かな、って……」

ヴィータ「はやての……いや……あたし達の、新部隊……」

一真「やつらも動き出したみたいだ……スーパー大シヨツカーが……」

次回 第四話「機動六課」それぞれの決意」
運命の切札をつかみ取れ！

第四話「機動六課」それぞれの決意」(前書き)

キバット「記念すべき仮面ライダー一号こと本郷猛を演じた藤岡弘はスタントマンでなく自ら仮面ライダーとなって撮影したことがあるのだ。ちなみに昭和ライダーと平成ライダーの第一作目に登場した怪人は蜘蛛を模している。魔法少女リリカルなのはRANGER☆RIDER☆Striker☆キバって始まるぜ!!!!」

第四話「機動六課」それぞれの決意

そして現在に至るのであった。試験の日から数日が経った。

フェイト「……と、そんなことがあって、八神二佐が新部隊の設立に奔走」

はやて「4年ほどかけて、なんとか私側のスタートが切れた、というワケや。」

リイン「部隊名は、時空管理局本局、遺失物管理部、機動六課！」

はやて「登録は陸士部隊、フォワード陣は陸戦魔導師が主体で、特定遺失物の捜査と、保守管理が主な任務や」

ティアナ「遺失物……ロストログアですね。」

蒼太「それからプレシヤスの確保も加わっているんだよ。」

ティアナ「それも聞いています。」

スバル「?????」

スバルは三人の言っていることが理解していなかった。

スバル（ティア、ティア）

ティアナ（何よー!!）

スバル（ロストログアとプレシヤスってなんだっけ？）

ティアナ（うっさい!! 話し中でしょ!!）

はやて「で……スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士」

そんなスバルやティアナへと順に視線を向けていき——はやては告げた。

はやて「私は、二人を機動六課のフォワードとして迎え入れたいと考えてる。厳しい仕事にはなるやろうけど……濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろ？」

スバル「あ……」

ティアナ「その……」

はやての突然の提案に、スバルはどう答えたものかと困惑する。見

れば、ティアナも同じような顔をしていて——そんな彼女達にフェイトが告げる。

フェイト「スバルは、高町教導官から魔法戦を直接教われるし……執務官志望のティアナには、同じ執務官志望の先輩として、私からいろいろとアドバイスできると思うんだ」

ティアナ「あ、いえ、とんでもない……と言いますか、恐縮です、と言いますか……」

するとそこへなのはと暁が

なのは「えっと……」

暁「取り込み中だったか？」

はやて「平気やよ。」

そういわれるとなのはと暁は腰をかけた。

スバル、ティアナ「……ハイ……」

暁「なのは、試験結果は告げる。技術に関しては問題はないが。自分やパートナーを危険な目を合わせたり、試験のルールを守らない魔導士は市民を守ったり、プレシヤスを確保することもできないだろ。」

ティアナ「……ハイ……」

暁「残念だが二人とも不合格……なんだが」

スバル、ティアナ「え!!?」

暁「二人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのはかえって危ない。それに、こちらの不手際で暴走したオートスフィアの攻撃に巻き込んでしまった負い目もある………というのが、俺となのはと試験官の共通見解だ。」

リイン「ですう!」

なのは「うん!ということでこれを……」

なのはは二人の目の前に二枚の封筒と一枚の書類を出した。

なのは「特別講習に参加するための参加用紙と推薦状ね。これを持って、本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから! 来週から本局の厳しい先輩たちにもしっかりも

まれて、安全とルールをしっかり学んでこよう！そうすればBランクの取得も問題ないと思うよ。」

スバル、ティアナ「ありがとうございます！！」

はやて「合格までは、試験に集中したいんやろ？あたしへの返事は、試験が済んでからって事にしとこっか。」

そして地上本部の庭では二人が寝転がっていた。

スバル「なんかいろいろと緊張したね。」

ティアナ「まあね・・・不合格は残念だったけれど・・・しょうがないわね。」

スバル「で、さ・・・新部隊の話、ティアはどうする？」

ティアナ「アンタは行きたいんでしょ？なのはさんと暁さんと拓人さんと士さんはアンタの憧れなんだし・・・同じ部隊なんて、すごいラッキーじゃない」

スバル「・・・そう、なんだけどさ・・・」

あっさりと返してくるティアナの言葉に、スバルは視線を落とし・・・

ティアナ「あたしはどうしようかな？ 遺失物管理部の機動課って

言ったら、普通はエキスパートとか、特殊能力持ちが勢ぞろいの生え抜き部隊でしょ？そんなトコに行ってさ、今のあたしが、ちゃんと働けるかどうか・・・」

つぶやき、ため息をつくティアナだったが――

ティアナ「・・・・・・・・・・・？」

ふと、そんな自分をスバルが楽しげに見下ろしているのに気づいた。

ティアナ「・・・何よ？気持ち悪い」

スバル「えへへ・・・『そんなことない！ティアもちゃんとできるって！』・・・って、言ってほしいんでしょ？」

ティアナの問いに、スバルは笑顔で拳を握りしめ、そう発言した。

ティアナ「・・・・・・・・（怒！！！！）」

スバルの発言に怒ったティアナは・・・・・・・・

ティアナ「何よそれはっ！！！！言ってほしくなんかないわよっ！！！！バカ言ってるんじゃないわよっ！」

スバル「きゃああああああああ！！！！！！痛い痛い痛い！！！！ギブギブ！！！！」

スバルの尻を思い切りつねり上げ、悲鳴の響く中ティアナはスバルに言い放つ。

とりあえず、スバルを放して悲鳴が止む——フンツ、とそっぽを向くティアナだったが、

スバル「……ねえ、ティア」

そんなティアナに、スバルは今度は優しく呼びかけた。

スバル「あたしは知ってるよ。ティアはいつも、口ではふてくされたこと言うけど、ホントは違うんだって。フェイトさんにだって、内心ではライバル心メラメラでしょ？」

ティアナ「ら、ライバル心とか、そんな大それたもんじゃないけど——」

スバル「嘘つき！！ティアのツンデレ！！」

ティアナ「……………（怒怒！！！！）」

またもスバルの発言に怒ったティアナは……………

ティアナ「こめかみをグリグリするわよ！！！！答えは聞かない！！！！！！！！」

スバル「もうやっているよ！！！！痛い痛い痛い！！！！ギブギブ！！！！」

今度はスバルのこめかみを握りこぶしでグリグリしながら、ティアナは再び怒りの声を張り上げる。

ティアナ「まったく……何言い出すかと思えば。知ってるでしょ？執務官は、あたしの夢なんだから……勉強できるならしたい、って気持ちはあるわよ」

スバル「だったらさ……やろうよ、ティア！」

ティアナの言葉に、復活したスバルはティアナに詰め寄り、スバル「あたしはなのはさんと暁さんと拓人さんと士さんにいろん

なこと教わって、もっともっと強くなりたい。ティアは新しい部隊で経験積んで、自分の夢を、最短距離で追いかける！」

ティアナ「……………そうね」

スバルの言葉に、ティアナの口元に笑みが浮かび――

スバル「それに、当面まだまだ、『二人でやっと一人前』扱いなんだからさ。まとめて引き取ってくれるの嬉しいじゃん♪」

ティアナ「……………（怒怒怒！！！！！！！！！）」

またもスバルの発言に怒ったティアナは……………

ティアナ「そ、れ、を、言、う、な！！！！！！メチャクチャムカツクのよ！！！！何が悲しくてあたしはどこ行ってもあんたのコンビ扱いなのよ！！！！」

スバル「きゃあああああああ！！！！！！痛い痛い痛い！！！！！！ギブギブ！！！！ごめんなさい！！！！！！！！！！」

もはやどんな技か判別不能――スバルにのしかかって右手をひねり上げ、空いている右手でスバルの頬をつねり、ティアナは三度言い放つ。

ティアナ「まあ、いいわ。うまくこなせれば、あたしは夢への短縮コースだし。あんたのお守りはごめんだけど、ガマンするわ」

スバルを解放し、ティアナは息をついてそう告げて――

スバル「うんうん、そーだよね♪あたしもまだまだティアと一緒にがんばりたいし♪」

すると……………

????「相変わらずに仲良くやってますね。」

スバル、ティアナ「え！！！！？」

そこにはこなた、つかさ、みゆきの三人がいた。

スバル「貴方は試験のときに拓人さんと一緒にいた……………」

こなた「私、泉こなた。チームデンライナーのメンバーだよ。」

つかさ「私は柊つかさ。よろしくね。」

スバル（士さんと同じ名前！？）

みゆき「高良みゆきです。よろしくおねがいします。」

スバル「こちらこそよろしくおねがいます!!」

こなた「あ、私達に対しては敬語じゃなくてもいいし。呼び捨てでもいいよ。」

スバル「はい!! これからもよろしくね!!」

つかさ「よろしくねスバルちゃん、ティアちゃん!!」

ティアナ「こちらこそね。」

すると

こなた「ティアナは見るからにツンデレですな。」

ティアナ「え!!?」

こなた「つまりかなり素直ではないことだよ。」

ティアナ「何、言ってるのよ!! 別にそんなことは・・・」

みゆき「そういえば、起動六課には乾さんも所属することになって
いますよ。」

ティアナ「え!!? 巧が!!」

スバル「その人って・・・」

ティアナ「私の幼馴染というか・・・私の大事な人・・・」

スバル「つまり恋人ということだね!! それをはっきり言ってほし
いな!! 本当にティアナはこなたの言うとおりツンデレだよ!!」

ティアナ「・・・（怒怒怒怒!!!!!!!!!!）」

その発言に怒ったティアナは・・・

ティアナ「アンタはすぐそうやってデリカシーのないことを!!!!
!!!!」

スバル「本当のことなのに!!!! 痛い痛い痛い!!!! ギブギブ

!!!! ごめんなさい!!!!!!!!」

ティアナはスバルを思い切りコブラツイストを食らわした。

つかさ「二人とも仲いいね。」

みゆき「本当ですね。」

こなた「かがみもティアナと同じくらい凶暴と素直じゃないという
ことだね。」

すると・・・

つかさ「こなちゃん……そういうこといわないほうが……」
みゆき「泉さん……遅すぎかもしれませんけど……後ろを
見てください……」

二人はなぜか怯えていた。

こなた「二人ともなんで怯えているの？」

ガシッ!!

こなた「って……え!？」

突然、頭をつかまれたこなたが見たものは……

かがみ「さっきはどういう意味かしら?こゝなゝたゝ」

大激怒のかがみの顔であった。

こなた「いや……その……つまり簡単に言うとツンデレという
ことだよ!!」

かがみ「……………(怒怒怒怒怒!!!!!!!!!!)」

ゴチンッ!!!!!!!!!!!!!!

こなた「ひでぶう!!!!!!!!!!!!!!」

かがみはこなたの頭に鉄拳を食らわせたのであった。

かがみ「まったく……こなたには困ったものだわ。私は柊かがみ。

チームデンライナーの一人よ。」

スバル「……………よろしく……………」

ティアナ「こちらこそ……………」

なぜか二人は怯えていた。

かがみ「どうして怯えているの？」

その答えは頭にサッカーボールくらい大きさを持つタンコブを作
ったうつ伏せになって気絶しているこなたにあった。

そんな様子をなのはとはやての姿があった。

はやて「……………あの二人は、まあ、入隊確定かな？」

なのは「だね」

はやて「それにしてもこなたちゃんは相変わらずやな。」

なのは「そうだね。」

その様子を舎内の廊下から見守り、つぶやくはやてになのはがうなずく。

はやて「なのはちゃん、嬉しそうやね」

なのは「二人とも、教え甲斐がありそうだし……今回は時間をかけて、じっくり教えられるしね。暁さんやたつくんや士君もいるしね。」

はやて「そうやね。」

なのは「新規のフォワード候補は、あと二人だけ？そっちは？」

はやて「二人とも別世界。今、シグナムとさくらさんと真墨君と菜月ちゃんとケイン君が迎えに行っとるよ」

すると

フェイト「なのは、はやて。お待たせ。」

ちようどそこへ、リインを連れたフェイトが戻ってきた。

はやて「ほんなら、次に会うのは、六課の隊舎やね」

リイン「みんなの部屋、しっかり作ってあるですよ♪」

なのは「うん」

フェイト「楽しみにしてる」

告げるはやてとリインになのはとフェイトが答えた。

フェイト「なのは……私はもう予定もないから、一度帰ろうと思うんだけど……なのははどうする？」

なのは「そっか……私ももう予定はないけど、一度教導隊の方に顔を出そうかな……」

フェイト「私、車で来てるから途中まで送るよ。」

なのは「ありがとう。」

フェイト「なのは……身体の具合、大丈夫？」

なのは「にやはは、うん、平気平気。全然問題なし♪」

フェイト「ホントに？ムリしてない？」

なのは「大丈夫だよ。心配性だなぁ、フェイトちゃんは」

フェイト「心配するよ。友達だもの……」

なのは「ありがとう。本当に平気だから気にしないで。」

ミッドチルダ、中央ターミナル——そのエントランスホールに、ひとりの少年の姿があった。

誰かを待っているのだろうか、初対面の者であれば誰もが目を惹かれるであろう見事な赤毛が特徴的なその少年は腕時計で時間を確認しながらせわしなく周囲を見回し——

エリオ「——あ！お疲れ様です！」

見つけた。三人の人物、シグナムと伊能真墨と西堀さくらに対し、少年は声をかけて駆け寄り、

エリオ「私服で失礼します！エリオ・モンディアル三等陸士です！」

シグナム「ああ。遅れてすまない——遺失物管理部、機動六課のシグナム二等空尉だ。」

真墨「同じくボウケンジャー02の伊能真墨だ。」

さくら「同じくボウケンジャー05西堀さくらです。長旅ご苦労さまです。」

敬礼し、名を名乗る少年——エリオに答えると、シグナム達は周囲を見回し、

シグナム「もう一人は・・・？」

さくら「たしか菜月とケイン君と一緒にしたのでは・・・」

エリオ「はい。まだ、来てないみたいで………あの、地方から出てくる、とのコトですので、迷ってるのかもしれない。探しに行っても、よろしいでしょうか？」

真墨「俺も行く。ケインはともかく菜月はどこかぬけているからな。」

さくら「おねがいします。」

エリオ「はい！」

まったく、初々しいものだ——微笑ましさを感じつつ告げるシグナムの言葉に、エリオは元気よくうなずいて見せた。

そのころなのは達は

なのは「ふーん……ホントにこの二人なんだね、フォワード候補」

フェイト「うん……まだ子供だから、ちょっと不安んだけどね……」

なのは「でも能力的には問題なさそうだよ。」

フェイト「まあ、私の隊だし……一緒なら、少しは安心かな、って……」

エリオ「ルシエさん！ルシエさん！」

真墨「菜月！！ケイン！！」

相手の名を呼びながら、エリオは人ごみをすり抜け、ターミナル内を駆けていく。

エリオ「管理局機動六課新隊員の、ルシエさん！いらっしゃいませんかー？」

そんなことを続けながら、エリオはエスカレータの前にさしかかり

キヤロ「あ、はい！わたしですー！」

菜月「真墨！！ごめーん！」

そんな彼らに答える声があった。

キヤロ「すみません、遅くなりましたーっ！」

エスカレータを駆け下りながら、こちらに向けて急ぐ、まだ幼い少女だ。そして間宮菜月もいた。

真墨「遅いぞ。菜月！！」

エリオ「ルシエさんですね？ボクは……」

ともかく、自己紹介しようとしたエリオだったが――

キヤロ「――きゃあっ!？」

菜月「キヤロちゃん！！危ない!!」

突然、少女が足を踏み外した。バランスを崩し、少女の身体は空中に投げ出され――

エリオ「――くっ！」

ストラダ「S o n i c m o v e !」

自分の腕時計が——いや、“腕時計を模したウェイトモードのデバイスが”告げるのと同時に、エリオの姿がその場から消えた。爆発的な加速力によって瞬時に加速、少女のもとへと跳んだのだ。人ごみをすり抜け、倒れそうになった少女を受け止めてエスカレータの上まで飛び上がり——

エリオ「——って、うわあっ!？」

キャラ「きゃあっ!？」

着地の際にバランスを崩した。何とか少女をかばうものの、エリオはそのまま仰向けに倒れ込んでしまいそうになるが、すぐにケイン・ルカーノが駆けつけた。

エリオ「いてて……すみません、ケインさん。」

ケイン「いいんだよ。二人とも無事でよかった。」

キャラ「ありがとうございます、助かりました」

倒れてしまったことを謝るエリオに、少女は身を起こしながら答え

——

キャラ「………ん？」

エリオ「………?」

ふと少女が何かに気づいた。見下ろす少女の視線を追ってエリオも視線を下げて——

エリオ「………っ!」

真墨「お前、いきなり胸を触っているぞ!!」

真墨の一言で気づいた。彼女を支えるためにそえていた自分の手が——しっかりと彼女の胸を押さえていることに。

エリオ「あ、すみません。今どきますね」

キャラ「い、いえ、こちらこそ、ごめんなさいっ!」

まだ幼い、という言い訳は通用しないだろうし、させたくもない——気にすることもなくエリオの上から降りる少女だったが、そんな彼女にエリオは改めて謝罪して——

フリード「きゅうっ………」

真墨「……………『きゅう』？」

返ってきたのは少女の声ではなく、動物の鳴き声——思わずエリオと真墨が顔を上げるその前で、少女は自分の抱えていたカバンを開き、

フリード「きゅくるっ！」

その中から顔を出したのは、1匹の竜の子供だった。

エリオ「竜の、子供……？」

真墨「ジャリユウ一族以外で見るのは初めてだな。」

エリオがつぶやくと、少女は彼へと向き直り、

キャロ「すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士と伊能真墨さんですよ」

エリオ「あ、はい」

真墨「ああ。」

エリオと真墨がうなずくと、少女は改めてフードを取り、キャロ「初めまして。キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。それから……この子はフリードリヒ。私の竜です」

ケイン「これからもよろしく。」

名乗る少女——キャロの言葉に、フリードリヒと呼ばれた竜の子供は彼女の手の中に舞い降り、エリオと真墨に対し名乗るかのように鳴き声を上げた。

その日の夜……

シャル「……………ヴィータちゃん、ザフィーラ、高丘さん、アド君。追い込んだわ」

展開された結界の中——“湖の騎士”シャルは探査魔法で目標の位置をつかみ、離れたところにいる仲間に告げる。

シャル「ガジェット？型……そっちに4体！それから剣崎君、橘さん、睦月君、巧君。アンデッドとオルフェノクを一体ずつも追い込んだわ。」

ザファイラ「……………来たな」

シヤマルの情報は正確だった——連絡からすぐに目標を視界に捉え、獣の姿をとっている“楯の守護獣”ザファイラは静かにつぶやく。報告どおり目標は3体。彼らが“ガジェット？型”と呼ぶ、まるで菓のカプセルのような形の自律機械達は猛然とこちらに突っ込んできて——

ザファイラ「オオオオオオツ！」

それをむぎむぎ通すザファイラではない。咆哮と同時に得意魔法“鋼の軛が発動、発生した魔力の錐が、先頭の1体の展開したフィールドと衝突する。”

とたん、錐はガジェットの防壁によって魔力の結合を解かれ、分解されていく——が、それよりも錐が本体に届く方が早かった。あっけなく機体を打ち貫かれ、先頭のガジェットが爆発、四散する。その爆発に紛れ、残り2体のガジェットがザファイラの脇をすり抜けていくが——

ヴィータ「でやあああああつ！」

その先には待ちかまえているのは“鉄槌の騎士”ヴィータ——手にした愛槌“鉄の伯爵”グラーフアイゼンでガジェットの1体を思い切り殴り飛ばし、粉碎する！

しかし、そんな彼女に対し背を向け、二体のガジェットが上空に逃れた。

ボウケンシルバー「逃がしはしないぜ！！サガスラッシュュ！！！！」
イーグルセイザー「イーグルタイフーン！！！！」

しかしボウケンシルバーとイーグルセイザーによって破壊された。

そのころ、少しはなれたところではバッファローアンドッドと戦っているブレイドとギャレンとレンゲルとバタフライオルフェノクと戦っているファイズの姿があった。

ギャレン「行くぞ！！」

レンゲル「はい！！」

二人はそれぞれのラウズカードをスラッシュした。

『バレット!!』

『スタップ!!』

二つの攻撃がバツファローアンデッドにクリーンヒットし、
レンゲル「剣崎さん!!」

ブレイド「ああ!!」

ブレイドは新たなラウズカードを取り出した。

『キック・サンダー・ライトニングブラスト!!』

ブレイド「はああああああああああ!!!!!!」

ブレイドのライトニングブラストでバツファローアンデッドは吹き飛ばされ、倒れた。そして、ブレイドはラウズカードを投げて、バツファローアンデッドを封印した。

そして、一方ファイズもバタフライオルフェノクを追い詰めていた。
そして・・・

ファイズはファイズエッジを取り・・・

ファイズ「はああああああああああ!!!!!!!!」

バタフライオルフェノク「ぐわああああああああ!!!!!!」

!!」

バタフライオルフェノクは青い炎を出しながら爆発した。そして、

四人は変身を解除した。

巧「そっちも終わったみたいだな。」

朔也「ああ、だがどうして急に怪人達が現れたんだ?」

睦月「それにBOARDから封印されたアンデッドが盗まれたのも
気になりますね。」

一真「俺と睦月のカテゴリーKを除く上級アンデッドも解放された
からな・・・これから厳しくなるな・・・それにやつらも動き出し
たな・・・スーパー大ショッカーが・・・」

ボウケンシルバー「シャル姐さん!!残りは?」

シャル「残存なし・・・全部つぶしたわ。それから剣崎君たちの

ほうも片付いたみたい。」

イーグルセイザー「そうか・・・」

二人は変身を解除した。

映士「ああ……動きもだんだん賢くなってきた」

アド「おまけに、こいつら自身の性能もな」

シャマル「でも、このくらいなら、まだ私達で抑えられるわ」

ザファイラ「そうだな……」

ヴィータ「ド新人に任せるには、ちょっとメンドい相手だけだな」

ザファイラ「仕方あるまい。我らだけでは手が足らぬ」

シャマル「大丈夫……そのための、新部隊だもの……」

ヴィータ「はやての……いや……あたし達の、新部隊……」

スバル「機動六課か……」

スバルは帰りの列車の中でそうつぶやいた。

続く

第四話「機動六課くそれぞれの決意」(後書き)

次回

はやて「機動六課課長、そして、そして、この本部隊舎の総部隊長、八神はやてです。」

フェイト「シグナム——本当に久しぶりです。」

光太郎「久しぶりだな。なのはちゃん、士。」

魁「俺達も今日から起動六課で世話になるからな。」

ヴィータ「同じ分隊だからな……あたしは空でなのはを守ってやらなきゃいけないえ」

次回 第五話「起動六課く集結」

戦わなければ生き残れない!!

第五話「起動六課〜集結」(前書き)

はやて「目指した夢は、少し長い時を経て……………今、やっと手の平の中……………思いと願いは違っても……………1つの場所に集まって、1つの事を始める……………出会いと再開と、始まりはここから……………それぞれの進んでいく道の、ここは……………小さな通過点……………集まり結ぶ……………新しい絆……………魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆StrikerS☆始まります。」

第五話「起動六課」集結

新暦75年4月。

時空管理局 遺失物対策部隊 機動六課隊舎 部隊長オフィス――
リイン「フフフフ♪このお部屋も、やっと隊長室らしくなりまし
たねー♪」

はやて「せやね♪」

自分のデスクに座り、上機嫌で声を上げるリインに、はやては笑顔
でそう答えた。

はやて「リインのデスクもちょうどええのが見つかってよかったな
あ」

リイン「えへへ……リインにピッタリサイズですーっ♪」

とそこへ、来客を告げるブザーが鳴った。

はやて「はい、どうぞ」

なのは、フェイト「失礼します」

はやてが答えると、自動扉が開いて、なのはとフェイトが入って来
る。

はやて「ああ、お着替え終了やな」

はやての言う通り、2人は陸士隊の制服に身を包んでいた。

リイン「お二人とも素敵です」

なのは「えへへ……」

フェイト「ありがとうリイン」

褒め言葉を送るリインに、照れた様に笑うなのはと、お礼を言うフ
ェイト。

はやて「3人で同じ制服姿は、中学校の時以来やね。なんやなつか
しい」

なのは達の前に立つと、懐かしむ様に言うはやて。

はやて「まあ……なのはちゃんは、飛んだり跳ねたりしやすい、
教導隊制服で居る時間のほうが、多くなるかも知れへんけど……」

なのは「まあ、事務仕事とか、公式の間ではこっちってことで」

なのはの言葉に、笑顔を浮かべるはやてとリイン。

フェイト「さて、それでは………」

なのは「うん………」

ここで2人は改まり、直立の体勢になると、はやてに向かってビシッと敬礼を送った。

なのは「本日はだいまより、高町なのは一等空尉」

フェイト「フェイト・テストロツサ・ハラウン執務官」

なのは「両名とも、機動六課へ出向となります」

フェイト「どうぞ、よろしく願います」

一応の形式上の挨拶を済ませる。

はやて「ハイ。よろしく願います」

そう言い終ると、3人して笑顔を見せる。

するとまたブザーがなった。

そこから現れたのはシャークと暁であった。

はやて「ああ、シャーク隊長に暁さんも……」

シャーク「これから我々セイザーXも諸君らの起動六課に所属する。

」

暁「同じくサージエス及びボウケンジャーも起動六課に所属する。」

はやて「はい、よろしくおねがいます。」

すると三度もブザーがなった。そこから現れたのはデンライナーのオーナーと嶋護とグリフィスであった。

オーナー「お久しぶりですね。八神はやて君。これから我々チームデンライナーも起動六課に所属しますのでよろしく願います。」

護「我々素晴らしき青空の会もだ。よろしく頼む!!」

はやて「はい、よろしく願います。それからグリフィス君も」

なのは「グリフィスくん、って、あのグリフィスくん!？」

はやて「そう!レティ提督の息子さん!なのはちゃん達だって前に一度会ってるやろ?」

フェイト「『今度異動になった』って聞いてたけど……まさか、そ

れってココだったの!？」

グリフィス「はい……。八神部隊長、報告しても、よろしいでしょうか？」

はやて「どうぞ♪」

グリフィス「フォワード4名を始め、編成式に出席する機動六課部隊員とスタッフ、全員そろいました。今はロビーに集合、待機させています」

はやて「そうか、士君達も来てるみたいやしそろそろ挨拶に行こうか。」

なのは、フェイト「うん!」

ロビーにはすでにスバル達を始め、機動六課の正規メンバーが勢ぞろいしていた。その中には士、大樹、ユウスケ、翔一、真司、連、巧、一真、朔也、睦月、総司、新、良太郎、侑斗、その契約したイマジン達、こなた、かがみ、つかさ、みゆき、みさお、あやの、ゆたか、みなみ、ひより、パティ、ななこ、コハナ、渡、名護、アームズモンスター（人間態）、ガオレンジャー、マジレンジャー、ボウケンジャー、セイザーXのメンバーもいた。そして、はやてがみんなの前に現れて、挨拶を始めた。

はやて「機動六課課長、そして、そして、この本部隊舎の総部隊長、八神はやてです。“平和と法の守護者”時空管理局の部隊として、事件に立ち向かい、人々を守っていくことが私達の使命であり、すべきことです。官民間わず実績と実力にあふれた指揮官陣。若く可能性にあふれたフォワード陣。それぞれ、すぐれた専門技術の持ち主の、メカニック及びバックヤードスタッフ——全員が一丸となつて、事件に立ち向かっていけると信じています。と、長すぎるあいさつは嫌われるんで、以上、ここまで。機動六課課長及び部隊長。八神はやてでした。」

挨拶が終わり、周りから拍手があふれ出した。

フェイト「シグナム——本当に久しぶりです」

シグナム「ああ、テストロッサ」

編成式も無事終わり、解散——二人で廊下を歩きながら、しみじみと告げるフェイトにシグナムが答える。

フェイト「同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞ、よろしくお願いします」

シグナム「こちらのセリフだ。だいたい、お前は私の直属の上司だぞ」

フェイト「それがまた、なんとも落ちつかないんですが……」

シグナム「だが、職場でのけじめはつけなければあるまい。テストロッサ相手に『お前』呼ばわりは良くないか。敬語でしゃべった方がいいか？」

フェイト「そ、そういういじわるはやめてください……いいですよ、『テストロッサ』で、『お前』で」

シグナム「フツ、そうさせてもらおう」

フェイト「うう」

するとそこへ

さくら「シグナムの言うとおりですよ。フェイト。」

フェイト「さくらさん。」

さくら「私もフェイトに対しては上官という立場で扱いますので・

・」

フェイト「さくらさんまで……そういういじわるなことを……」

「

さくら「冗談です。普段どおりでいいですよ。」

フェイト「うう」

一方、ここはデンライナー

良太郎「なんとか挨拶のほうも終わったみたいだね。」

モモタロス「そうだな。俺には退屈だったけれどな。」

こなた「モモっちはどこにいても変わらないよね。」

リュウタロス「そうだね。」

モモタロス「どういう意味だよ!! 小僧にちびすけ!! まあそれよりその新人共の中に俺達を倒した奴がいるみたいだな。」

良太郎「そうだけど・・・」

モモタロス「どんなやつかどうか見てくるか。」

ウラタロス「止めておいたほうがいいよ。どうせ喧嘩になるし、僕として友達になりたいぐらいだよ。」

モモタロス「亀、テメエの場合はナンパだろ・・・」

ウラタロス「喧嘩好きな先輩よりはマシだと思うよ。」

モモタロス「なんだと!!!!」

モモタロスとウラタロスは喧嘩になりそうになったが・・・

コハナ、かがみ「やめなさい!!!」

コハナとかがみのパンチによって止められた。

こなた「いつものように止められましたな。」

良太郎「ハハハ・・・」

良太郎とこなたは苦笑いをしていた。

キンタロス「Z z z・・・」

キンタロスはぐっすりと眠っていた。

そのころ別のルートではなのはと暁と拓人と士がフォワードメンバーを連れて歩いていた。

なのは「そういえば……」

フォワード要員4名を連れて廊下を歩き——なのははふと口を開いた。

なのは「みんなはもう、自己紹介とか済ませたのかな？」

スバル「あ、えっと……」

ティアナ「自己紹介と経験やスキルの確認は、すでに」

エリオ「あと、部隊分けや、コールサインの確認もです」

暁「そうか・・・なら」

なのは「それじゃあ、早速訓練に入りたいんだけど……いいかな？」

フォワードメンバー』はい!』

拓人「皆も待ってるからな。」

士「ついて来い!!」

すると

光太郎「おっ、なのはちゃんと士じゃないか。」

なのは「あつ光太郎さん。お久しぶりです。」

士「アンタもこの所属なのか?」

光太郎「いや俺はこのあたりに奴らがいないか確かめているだけだ。」

なのは「そうですか。お互いに頑張りましょうね。」

光太郎「ああ・・・」

そして八人は再び歩き出した。

機動六課隊舎・屋上……

待機した1機のヘリの横に、1人の男が控えていた。

はやて「ああ、ヴァイスくん。もう準備できたんか?」

そこへ、屋上への扉が開き、はやて、リイン、フェイト、さくらが姿を見せる。

ヴァイス「準備万端!何時でも出れますぜ!」

男……機動六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニック陸曹は、はやての問い掛けにそう答える。

フェイト「うわー!このヘリ、結構新型なんじゃない?」

ヘリの外見を見たフェイトが、そんな言葉を漏らす。

ヴァイス「JF704式……一昨年から武装隊で採用され創めた、新鋭機です。機動力も積載能力も、一級品ですよー」

ヘリを見ながら、嬉しそうに語るヴァイス。

ヴァイス「こんな機体に乗れるってのは、パイロットとして幸せでしてねー」

リイン「むー!ヴァイス陸曹!」

と、リインが、何やら怒った様子で、ヴァイスの目の前に浮かんだ。

リイン「ヴァイス陸曹は、皆の命を乗せる乗り物のパイロットなんですから。ちゃんとしてないと駄目ですよ」

さくら「リインの言うとおりです！！しっかりしなさい！！」

ヴァイス「ヘイヘイ、分かっていますわーね。リイン曹長、さくらさん」

そのまま、はやてとフェイトが、ヘリに乗り込むのを確認すると、ヴァイスはコックピットに座った。

ヴァイス「八神隊長！フェイトさん！行き先はどちらに？」

はやて「首都クラナガン」

フェイト「中央管理局まで」

ヴァイス「了解！行くぜ、ストームレイダー」

2人に行き先を聞くと、機体補助AIの『ストームレイダー』に発進を促がす。

ストームレイダー『OK。離陸します』

ストームレイダーが、そう答えると、ヘリは浮かび上がり、首都クラナガンの中央管理局目指して飛び去って行った。

一方――なのはは教導隊の制服への着替えを済ませ、目の前に広がる訓練場を眺めていた。

暁と拓人と士も一緒である。

シャリオ「なのはさん！！」

牧野「明石君！！」

アド「拓人！！」

ケイン、レミー「たっくん！！」

そんな彼女たちの元に駆けてくるのは、自分達にとっても親しい間柄にあるシャリオ・フィニーノ一等陸士と牧野森夫とアド、ケインとレミーだ。

なのは「シャーリー！」

暁「牧野先生！！」

拓人「みんな!!」

するとウォームアップのランニングに出ていたスバル達がやってきた。

なのは「今返したデバイスには、新たにデータ記録用のチップが組み込まれてるから、今までよりもちょっとだけ大切に扱ってね」

暁「それからメカニックのシャーリーと牧野先生から一言。」

シャリオ「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任のシヤリオ・フィニーノ一等陸士ですーみんなは『シャーリー』って呼ぶので、良かったらそう呼んでね。みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々訓練を見せてもらったりします。……あ、デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね?」

牧夫「ええとサージェスのメカニック及びプレシヤスの分析を担当する技術者の牧夫守男です。これからもよろしくね。」

フォワードメンバー『はい!』

元気にスバル達は返事を返す

ケイン「なかなかいい返事だね。」

レミー「うん。」

なのは「じゃ、早速訓練を始めようか」

スバル「は、はい……」

ティアナ「でも……」

なのはの問いにうなづくもののースバルとティアナは不思議そうに辺りを見回した。相方に代わり、ティアナが尋ねる。

ティアナ「ここで、ですか?」

暁「そうだ。ここが君達の訓練場となるのだ。」

そう。なのはの背後には海上に整備されたフィールドが広がるのみだ。ここで一体何の訓練をするというのか――

拓人「見れば分かるさ。」

なのは「うん……シャーリー!!」

シャリオ「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸

戦用空間シミュレーター」

言いながら、手馴れた動きで端末に設定を打ち込んでいき――
シャリオ「ステージ、セット♪」

その言葉と同時にエンターキー。同時――海上のフィールドがその姿を変えた。表面が薄い魔力膜に覆われたかと思うとそれが盛り上がり、わずかな時間で廃棄都市へとその姿を変えたのだ。

スバル「うわぁ……………」

ティアナ「わぁ……………」

エリオ「ああ……………」

キャロ「凄……………」

その光景に、驚きを露にする新人4人。

その光景を、別のエリアで眺めている人影があった……………

シグナム「ヴィータ、城戸……………ここにいたか」

ヴィータ「シグナム……………」

真司「姉さん……………」

ヴィータとシグナムと城戸真司だった。

シグナム「新人達は早速やっているようだな」

ヴィータ「ああ」

シグナム「お前達は参加しないのか？」

ヴィータ「四人ともまだよちよち歩きのヒヨッコだ。あたしが教導を手伝うのはもうちょっと先だな」

真司「俺の実力じゃあの四人がかわいそうだな。」

新人達の様子を見ながら、シグナムにそう言うヴィータと真司。

シグナム「そうか」

ヴィータ「それに自分の訓練もしたいしさ。同じ分隊だからな、私は空でなのは守ってやらなきゃいけないえ」

シグナム「……………頼むぞ」

真司「ところでシャマル姐さんは？」

真司が、思い出した様に聞く。

シグナム「自分の城だ。高岳や小津家の皆もいる。」
ヴィータと真司も納得したような顔をした。

機動六課隊舎・医務室……………

シャル「うふうん……………良い設備！これなら検査も処置も、かなり確り出来るわね！」

机の上を撫でながら、嬉しそうに言うシャル。

ルキノ「本局医療施設の払い下げ品ですが……………実用にはまだまだ十分ですよ」

アルト「皆の治療や検査、よろしくお願いしますね、シャル先生」
シャル「はい！」

設備の調整をしながらそう言う薄紫の髪の女性……………ルキノ・リリエと、黄土色の髪の女性……………アルト・クラエッタに、シャルは笑顔で返事をする。

すると

映士「おいシャル姐さん！！なんで俺様も手伝わなければいけないんだ！！」

シャル「高丘さんもたまに手伝わないといけないわよ。魁君たちは進んで協力しているのに。」

映士「だからって……………」

シャルの後ろには荷物を運んでいる映士と魁と翼と詩人がいたのであった。

魁「俺達も今日から起動六課で世話になるからな。」

翼「それくらいやらないとな。」

詩人「芳香や麗も母さんの手伝いしてるし、俺達だけ休んでいるわけにはいかないからな。」

映士「くっ……………こんなことになるんだったら明石と一緒に行けばよかった。」

シャル「皆もお願いね。」

舞台は、再び訓練場へと戻る……………

仮想空間内の街中に立った新人4人は、なのはと暁と拓人の指示を待っていた。ちなみに士は急用があるので退散したのであった。

なのは『よしと！皆、聞こえる？』

そこへ、待ちに待ったなのはの声が響く。

フォワードメンバー「「「ハイ！」」」

なのは「じゃあ、早速ターゲットを出して行こうか？」

暁「まずは軽く八体から。シャーリー、牧野先生！！」

シャーリー「はい！！動作レベルC……………」

牧野「攻撃制度Dってどこですかね？」

暁「ああ……」

拓人「俺達の仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理だ。」

なのは「その目的の為に、私達が戦う事になる相手は……………コレ！」

なのはの声と共に、新人達の前に展開していた魔法陣から、縦長の形をしたメカ……………ガジェットが現れた。

フォワードメンバー「「「！！！」」」」

身構える新人達。

牧野「自立行動型の魔導機械。コレは、近づくとき攻撃してくるタイプですね。攻撃は結構鋭いですよ」

なのは「では、第1回模擬戦訓練。ミッション目的……………」

暁「逃走するターゲット8体を破壊……………」

拓人「もしくは捕獲だ。制限時間は15分以内」

フォワードメンバー「「「ハイ！！！」」」」

シャーリー「それでは……………」

なのは「ミッション……………」

拓人「開始だ！！」

合図が送られ、ガジェット達は、逃走を始めた！！

時空管理局・ミッドチルダ地上本部、中央議事センター……………

はやて「搜索指定遺失物……ロストログアについては、皆さん良
くご存知の事と思います」

薄暗くされた部屋で、はやては、集まった幹部達を前に、説明を行
っていた。

はやて「様々な世界で生じたオーバーテクノロジーの一因……消
滅した世界や、古代文明を歴史に持つ世界で発見される危険度の高
い古代遺産。」

後ろのモニターでは、様々なデータが映し出されている。

はやて「特に、大規模な災害や事件を巻き起こす可能性のあるロス
トロギアは、正しい管理を行わなければなりません……盗掘や
密輸による、流通ルートが存在するのも確かです」

幹部達は、皆黙ってはやての話を聞いていた。

はやて「さて……我々機動六課が設立されたのには、1つの理由
があります」

はやてがそう言うと、後ろのモニターに、金色の台座に収まった赤
い水晶の様な物が映し出される。

はやて「第1種搜索指定ロストログア……通称、『レリック』」
フェイト「このレリック……外観は只の宝石ですが、古代文明時
代に何らかの目的で作成された超高エネルギー結晶体である事が判
明しています」

モニターに結晶……『レリック』の詳細なデータが映し出される。
さくら「レリックは、過去に4度発見され、その内3度は、周辺を
巻き込む大規模な災害を起こしています」

モニターに映るレリックが起こした災害の様子に、畏怖の様子を露
にする幹部達。

フェイト「そして……後者2件では、この様な拠点が発見されて
います」

今度は、まるで何かの実験場の様な施設の映像が出現する。

さくら「極めて高度な、魔力エネルギー研究施設です。発見され
たのは、何れも未開の世界……こういった施設の建造は許可されて

いない地区で、災害発生直後に、まるで足跡を消すかの様に破棄されています」

フェイトとさくらは、一旦話を句切って、モニターの前に立つ。

フェイト「悪意ある………少なくとも、法や、人々の平穏の守る気の無い、何者かがレリックを収集し、運用しようとしている………広域次元犯罪の可能性が高いのです」

モニターが切り替わり、ガジェット映像が映し出される。

さくら「そして、その何者かが使用していると思われる魔導機械がこちら………通称『ガジェットドローン』。レリックを始め、特定のロストログアの反応を搜索し、それを回収しようとする自律行動型の機械です」

スバル「おおおおおっ！」

真っ先に飛び出したのは、やはりローラーブーツを履いている分トップスピードに優れるスバルだった。先頭に立ってガジェットの1機に追いつき、跳躍——真上からリボルバーナックルを繰り出す。そのモーションに合わせ、放たれるリボルバーシユート——しかし、すでに彼女の接近を感じていたガジェットは、まるで風船が障害物を避けるかのようにフワリとその攻撃を回避する。

スバル「何これ！！速い………！？」

思わず声を上げるスバルだが——

エリオ「それなら！」

彼女の取り逃がしたガジェット群の行く手にエリオが飛び出してきた。とっさに攻撃に移るガジェット——しかし、エリオは放たれる魔力弾をかくぐって跳躍、相手が自分への照準を合わせ直すよりも速く愛槍“ストラダー”を振るい、スバルのリボルバーシユートよりも幾分弾速の速い、飛翔型の魔力刃を放つ。だが——当たらない。ガジェットは素早く軌道を変え、エリオの魔力刃をかわして彼の脇を突破していく。

エリオ「ダメだ………！フワフワ避けられて、当たらない………！」

スバル「エリオ！コイツら、思ったよりも動きにムダがないよ——ストレートに攻めてもかわされちゃう！」

思わずうめくエリオに、追いついてきたスバルが声をかけると——ティアナ『前衛二人！！突出しすぎ！』

そんな二人に、ティアナからの叱責の声が届いた。

ティアナ「ちよつとは後ろのこと考えて！」

エリオ『あ、はい！』

スバル『ゴメン！』

こちらの叱責に対し、エリオ、スバルから順に謝罪の声が上がる——が、自分だってただ二人にばかり任せていたわけではない。キャロ、フリードと共にガジェットの進路に回り込んでいたティアナは、ビルの上から眼下の道路を駆け抜けていくガジェットへと狙いを定めた。

ティアナ「ちびっ子、威力強化、お願い！」

キャロ「はい！ケリュケイオン！」

〈Boost Up, Bullet Power！〉

キャロが、自分のデバイス……手袋型の『ケリュケイオン』に呼びかけると、足元に魔法陣が展開し、続いてティアナの足元にも出現する。射撃の威力を上げる、補助魔法『ブーストアップ・バレットパワー』だ。

ティアナ「シュート！！」

強化された魔法弾を、ガジェット目掛けて連続で放つ！しかし……：ガジェットが、バリアの様なモノを展開すると、魔力弾はその上で掻き消されてしまう。

ティアナ「バリア！？」

キャロ「違います……フィールド系！」

スバル「魔力が消された！？」

なのは『そう。ガジェット・ドローンにはちよつとやっかな性質があるの。』

暁『攻撃魔力をかき消すアンチマギングフィールド、AMF。普

通の射撃は通じないし………』

なのはと暁が話している途中で、ガジェットはビルを飛び越えて逃走して行く。

スバル「あ！？ この！！」

スバルが、ウイングロードを出現させ、追おうとするが………

ティアナ「スバル！馬鹿、危ない！！」

なのは「それに、AMFを全開にされると……」

なのはの言葉通り、ガジェットがAMFを全開にすると、ウイングロードが掻き消された！

スバル「ふえ！？あ、ああ！うわあああー！ー！ーっ！！」

突然の事態に気が動転したスバルは、まともに対応できず、飛び越えようとしたビルの窓に突っ込んだ！

なのは「気象や足場作り。移動系魔法の発動も困難になる………」

拓人「まともにぶつかったけど……スバル大丈夫か？」

スバル「はい……なんとか……」

シャーリー『まあ、練場では皆のデバイスにちよつと工夫をして、擬似的に再現してるだけなんだけどね……でも、現物からデータをとってるし、かなり本物に近いよ』

なのは「対抗する方法は幾つか在るよ。どうすればいいか、すばやく考えてすばやく動いて！」

ガジェットをモニターに映して見ていたティアナは………

ティアナ「………チビツ子、名前、何て言ったっけ？」

キャロ「キャロであります」

ティアナ「キャロ、手持ちの魔法と、そのチビ竜の技で何とか出来そうなのある？」

キャロ「試してみたいのが、幾つか」

ティアナ「私もある」

ティアナは、モニターを消すと、相棒に念話を飛ばす。

『スバル!』

スバル『OK! エリオ! アイツ等逃がさない様に、先行して足止め出来る?』

それを受けたスバルは、エリオへと念話を繋ぐ。

エリオ『あ、えっと……………』

スバル『ティアが何か考えてるから、時間稼ぎ!』

エリオ「やって見ます!!」

なのは達のいるビルの屋上……………

シャーリー「へえ。皆よく走りますね」

牧野「本当に元気そうですね。」

なのは「危なかつしくてドキドキだけどね。デバイスのデータ、取れそう?」

シャーリー「良いのが取れてます。4機とも良い子に育てますよ。」

牧野「レイジングハート君も、協力してくださいね」

『all light』

シャーリーと牧野の言葉に発光するレイジングハートだった。

拓人「ところで……士はどこにいったんだ?」

暁「さあな?」

訓練場内……………

道路を疾走してくる4機のガジェットを、橋梁上で待ち伏せるエリオ。

エリオ「行くよ、ストラダー! カートリッジロード!!」

『Explosion!』

カートリッジを1発ロードさせ、足元に魔法陣を展開する。

エリオ「でやあああああ!! は! てい! でや!」

そして、ガジェットが橋の下に到着した瞬間に橋をスピーアシュナ

イデンで切り崩し、瓦礫をガジェットの上に落とした。それにより、2機潰されたが、生き残った2機が粉煙の中から飛び出して来る。スバル「うりゃああああー！ー！ー！潰れてろ！……それなら！！」

しかしそこへ、別の場所に待機していたスバルが飛び出し、生き残った片方に、魔力を込めたリボルバーナックルの一撃をお見舞いするが、AMFに阻まれ、取り逃がしてしまう。

スバル「やっぱ魔力が消されちゃうと、イマイチ威力が出ない……」

着地したスバルがぼやいていると、後ろからもう1機のガジェットが攻撃を加えようとするがスバルは、素早く蹴りを叩き込み、そのまま足を絡めてガジェットの背後からマウントポジションを取る。スバル「うりゃああああー！ー！ー！っ！！」

そのまま通常攻撃で、ガジェットを粉碎した。

一方、ティアナとキャロの方は……

キャロ「連続、行きます！フリード！ブラストフレア！」

キャロがビルの上から、フリードに命じて、ガジェットに狙いを定める。

フリード「きゅうくっくっ！」

命を受けたフリードは、目の前に小さな火球を形勢する。

キャロ「ファイヤ！」

そして、キャロの掛け声と共に、ガジェット目掛けて発射した。

火球は、ガジェットがいる地面に命中し、辺り一体を炎に包む。炎の熱によって、スパークを発するガジェット。そのままキャロは、呪文詠唱に入る。

キャロ「我が求めるは……戒める物……捕らえる物……言の葉に答えよ……鋼鉄の縛鎖……錬鉄召喚！アルケミックチェー
ン！！」

詠唱が終ると、ガジェットの真下の地面に魔法陣が出現し、そこから無数の鎖が現れ、ガジェットを捕獲した。

ビルの屋上……

シャーリー「うわ〜！召喚って、あんな事も出来るんですね〜！」

牧野「まったくもっての驚きですね。」

様子を見ていたシャーリーと牧野が、驚きの声を挙げる。

なのは「無機物操作と組み合わせてるね……」

暁「中々器用なやり方だ」

拓人「そうだな。」

なのはと暁と拓人も、感嘆の声を漏らす。

訓練場……

ティアナは、捕獲されたガジェットの近くにのビルの上に立ち、逃走中の残り2機に狙いを定める。

ティアナ「こちらら射撃型……無効化されて、はいそうですか、って下がってたんじゃ、生き残れないのよ!!」

足元に、魔法陣が展開する。

スバル『スバル！上から仕留めるから、そのまま追って!!』

スバル『おう!!』

相棒に念話で指示を送り、ティアナは魔力弾を形成する。

ビルの屋上……

シャーリー「魔力弾？AMFがあるのに？」

レイジングハート『いえ、通用する方法があります』

なのは「うん」

シャーリーの疑問の声に、応えるレイジングハートと頷くなのは。

訓練場……

ティアナ（攻撃用の弾体を無効化フィールドで消される膜状バリアで包む……フィールドを突き抜けるまで間だけ、外郭が持てば…

……本命の弾は……ターゲットに届く!!」

ティアナの考えている通りに、魔力弾に膜の様な物が張られていく。

ビルの屋上……

なのは「フィールド系防御を突き抜ける多重弾核射撃。AAランク魔道師のスキルなんだけどね」

シャーリー「AA!？」

暁「俺はティアナならできると信じている!!」

訓練場……

ティアナ（固まれ……固まれ……固まれ……固まれ!!）

まるで念じる様に魔力弾を形成させていくティアナ。

ティアナ「うわああああ……っ!!」

そして遂に、形成に成功する!!

ティアナ「ヴァリアブル! シュウウウ……トッ!!」

叫びと共に、弾丸……ヴァリアブルシュートが発射された。弾丸は、追跡していたスバルの横を通り過ぎ、ガジェットのアMFにブチ当たる。一瞬の均衡の後……弾丸は、AMFを突き破り、ガジェット本体に風穴を開けた。さらに続けて、残り1機のガジェットも、撃墜した!!

スバル「ティア! ナイス!! ナイスだよ、ティア!! やったね流石!!」

ティアナ「はあ……はあ……スバル……煩い」

肩で息をしながら、律儀にスバルに言い返し、ティアナは大の字に寝転んだ。

ティアナ「このくらい……当然よ……」

そのころ訓練場から離れた士はディケイドに変身して、一体のグロウギを追い詰めていた。

ディケイド（やはり、前回の件はお前達、スーパー大ショッカーの

仕業だろ。」

グロンギ（リントと話すことなどない!!）

ディケイド「そこまで知れば十分だ!!」

そして・・・ディケイドとレジェンドはライドブッカーから一枚のカードを抜き取り、それをバックルへと装填してスライドさせる。

『ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディケイド』

電子音声が響くと同時に、二人の前にライドカードのようなオーラが数枚現れる。

ディケイド「ハアアッ！」

ディケイドは高く飛び、オーラを潜るようにグロンギへと蹴りを放っていた。

複数あるディケイドの技の一つ、ディメンションキックが炸裂し、グロンギは断末魔の叫びをあげながら爆発して散っていた。それを確認したディケイドはディケイダーに乗るとその場から去った。

その後、訓練は日が落ちるまで続けられ、終わった頃には、新人達は皆疲労困憊になっていた。

そのころここはスーパー大ショッカー基地

地獄大使「くっ・・・スカリエッティめ、預けた怪人達を次々と無駄死にしおって!!」

ジャーク將軍「やはり奴の言うとおりにしたこと事態が間違ってたわ!!」

地獄大使「こうなったら奴を殺して・・・」

???「まだ早いぞ地獄大使よ。」

地獄大使とジャーク將軍の前に現れたのは白い長い髪を生やした老人であった。

地獄大使「しかし死神博士!! 奴は預けた怪人たちを無駄死にしたんだぞ!!」

死神博士「地獄大使よ、お主はそそっかしすぎるのじゃ。奴にも考

えがあるからのう。」

ジャーク將軍「確かに奴のいった戦闘機人達も完成が近づいておるしな。まだ利用価値はあるかも知れんな。」

地獄大使「しかし・・・」

死神博士「地獄大使よ、お主は頭が上がりすぎじゃ。それにその声を上げると喉がかれるぞ。」

地獄大使「くっまた嗽をすればいい!!」

死神博士「どうかな？」

地獄大使はしばらく考え・・・

地獄大使「わかった。お主の言葉通りにしよう!!」

すると一人の蜂のような女性怪人が現れた。

蜂女「死神博士様。お酌ができましたよ。」

死神博士「おお・・・そうかではいくとするか・・・でいつものやつか？」

蜂女「もちろんですわ。お酒はキンキンに冷やしたビールで御つまみは炙ったスルメイカですわ。」

死神博士「おお・・・それは私の大好物じゃ。」

そういうと死神博士はその場から去った。

地獄大使「相変わらず死神博士はうらやましいの。」

ジャーク將軍「それよりも地獄大使よ。今度の作戦は余に任せてはくれんか？」

地獄大使「策があるのか？」

ジャーク將軍「まあ・・・まかせておけ・・・」

こうして・・・スーパー大ショッカーは動き出した。

続く

第五話「起動六課」集結（後書き）

次回

なのは「みんな、訓練にも慣れてきたし…そろそろ実践用の新デバイスに切り替えかなあ」

士「お前達の新しい力だ！！」

スバル「うわぁー！これが！」

ティアナ「アタシ達の新デバイス、ですか……………」

モモタロス「言っとくが俺は最初から最後までクライマックスだぜ！！」

次回 第6話 ファースト・アラート

魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆Strikers☆

とりあえず、本編は別ストーリーの劇場版を作ってみました。

劇場版？

魔法少女リリカルなのはStrikers 起動六課VSスーパー
戦隊

劇場版？

らき☆すた オールライダーVSスーパー大ショッカー
となっております。

予告

この地球には二つの正義の戦士達が守っていた。仮面の戦士と五色の戦士達である。

これはそれぞれを守った戦士達のもう一つの物語の序章である。

魔法少女リリカルなのはStrikers 起動六課VSスーパー戦隊

地球にこれまでにない反応に気がついた。なのは達の前に現れたのは悪魔王グランデス。彼は強大なる力でなのは達を別次元へと飛ばしたのであった。そんな彼女達が出会ったのは歴代のスーパー戦隊！！

シャマル、ザフィーラはガオレンジャーの世界で

ガオレッド「シャマル、ザフィーラ！！行くぞ！！！」

シャマル「分かったわ獅子君！！」

ザフィーラ「心得た！！」

エリオ、キャロ、ルーテシアはハリケンジャーの世界で

ハリケンレッド「エリオ！！キャロ！！ルー！！行くぜ！！」

エリオ「はい！！鷹介さん！！」

キャロ「いつでも準備完了です！！」

ルーテシア「うん！！」

ヴィータはアバレンジャーの世界で

アバレッド「ヴィータさん！！行きますよ！！！」

ティラノ「一気にやってやるテラ！！！」

ヴィータ「こっちもいいぜ！！凌駕！！ティラノ！！！」

ティアナはデカレンジャーの世界で

デカレッド「ティアナ！！同時に攻撃するぞ！！！」

ティアナ「わかったわ!!バン!!!!」

ギンガ、ナカジマ家ナンバーズはマジレンジャーの世界で
マジレッド「行くぜ!!ギンガ!!皆!!」

ギンガ「分かったわ!!魁君!!」

シグナム、アギトはボウケンジャーの世界で

ボウケンレッド「行くぞ!!シグナム、アギト!!」

シグナム「明石、私なら大丈夫だ!!」

アギト「そうだぜ!!」

スバルはゲキレンジャーの世界で

ゲキレッド「行くぞ!!スバル!!ワキワキだ!!」

スバル「いいよ!!ジャン!!ワキワキだね!!」

はやて、リインはゴオンジャーの世界で

ゴオンレッド「マッハで行くぜ!!はやて!!」

スピードル「リインも頼むぜ!!ドルドル!!」

はやて「まかせておき!!走輔君!!」

リイン「スピードルもおねがいますね。」

フェイトはパラディンジャーの世界で

パラディンレッド「フェイトさん、お願い!!」

パラディンフェニックス「私達に力をお貸しください!!」

フェイト「いいよ!!麗奈、フェニックス!!」

なのは、ヴィヴィオはシンケンジャーの世界で

シンケンレッド「行くぞ!!なのは!!ヴィヴィオ!!」

なのは「うん・・・こっちはいいよ!!丈瑠君!!」

ヴィヴィオ「大丈夫です!!」

それぞれ様々な出会いがあった。

その危機を察知した歴代の赤き戦士達はゴセイジャー達にこのことを知らせ、なのは達を救出させるために悪魔王グランデスと戦うことになったのだ。

しかし、グランデスはウォースターと手を組み、総理害臣ヨゴシマ

クリティンと無間龍ロンを復活させてゴセイジャーを追いつめる。
しかしそんな時なのは達とスーパー戦隊が現れた。そして・・・グ
ランデスとの戦いが始まった。

ゴセイレッド「悪いが俺は諦めることを知らないんだ!!」
なのは「私達は絶対に諦めないから!!」

らき☆すた オールライダーVSスーパー大ショッカー

こなた達がやってきたのは謎の城であった。謎の集団によってつか
まったこなた達の前に現れたのは様々な怪人達であった。彼らの名
はスーパー大ショッカーである。

ディケイドとディエンドのおかげで助かった彼女達は士達からすべ
てを聞いた。

士「世界は・・・スーパー大ショッカーの手に落ちた。」

大樹「だけどすべての仮面ライダーを集めればなんとかなるよ。」

そして・・・こなた達は平成仮面ライダーの世界へと向かった。そ
こで様々な世界で新たな出会いが会った。

みさおはクウガの世界で

クウガ「行くぜ!!みさお!!」

ワイルド「いつでもいいぜ!!五代!!」

あやのはアギトの世界で

アギト「行くよ!!あやのちゃん!!」

ビーナス「分かったわ!!津上さん!!」

かがみは龍騎の世界で

龍騎「いくぜ!!かがみ!!」

パープル「分かったわ!!真司!!」

みなみはファイズの世界で

ファイズ「行くぞ!!みなみ!!」

ウイング「はい、巧さん!!」

パティはブレイドの世界で

ブレイド「行くぞ!!パティ!!」

クロス「いいデスよ!! 剣崎さん!!」

みゆきは響鬼の世界で

響鬼「よーし!! 行くか、みゆき!!」

ホワイティス「わかりました!! 響鬼さん!!」

ひよりはカブトの世界で

カブト「行くぞ!! 田村!!」

ブリザード「いいッスよ!! 天道さん!!」

つかさは電王の世界で

電王S「行くぜ!! つかさ!!」

フェアリー「うん!! 良君!! モモ君!!」

ゆたかはキバの世界で

キバ「行くよ!! ゆたかちゃん!!」

キバット「キバっていくぜ!!」

エンジェル「はい、渡さん、キバットさん!!」

こなたはWの世界で

WS「いくよ、こなちゃん!!」

WJ「一気に決めるぞ!!」

スター「いいよ!! 翔太郎、フィリップ!!」

士はマギウスの世界で

マギウス「やりましょう!! 士さん!!」

ディケイド「いいぜ!! ネギ!!」

大樹はヴァルキリーの世界で

ヴァルキリー「行くよ!! 海東君!!」

ディエンド「いいよ!!」

それぞれ様々な出会いをした。

そしていよいよ全ライダーが集結し、スーパー大ショッカーとの決戦が始まった。

この夏公開決定!!

魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆Strikers☆

私のブログでも活躍している仮面ライダーもいますので楽しみにしてください。

第6話「ファースト・アラート」前編（前書き）

スバル「見つけてもらえて、巡り会う事が出来た、新しい居場所……」

ティアナ「ここでもやっぱり、空を見上げて戦っていく日々……」
スバル「憧れ続けた人がいて、大切な友達と一緒に、新しい出会いと恋の再燃があって……思いが何時か、あの空に届くまで……」
ティアナ「遠くて高い壁だって、心を決めて立ち向かう……」

スバル「皆で、一緒に……魔法少女リリカルなのはRANGER
S☆RIDER☆StrikerS☆始まります。」

長くなるので今回から分けます。

第6話「ファースト・アラート」前編

拝啓。

父さん、ギン姉へ。お元気ですか？スバルです。あたしとティアがここ、機動六課の所属になってから、もう2週間になります。

本出動（ボウケンジャーのプレシヤス回収作業やチームデンライナーの出動を除く）はまだなくて、同期の陸上フォワード4人、それから一緒に現場に出ることになるしかも、まだ一番最初の第一段階です。部隊の戦技教官、なのはさんや暁さんや拓人さんや土さんの訓練はかなり厳しいんですが、しっかりついていけば、もっともつと、強くなれそうな気がします。当分の間は24時間勤務なので、前みたいにくちよくちよく帰ったりはできないんですが、母さんの命日には、お休みをもらって、帰ろうと思います。じゃあ、またメールしますね。スバルより

機動六課・訓練場……

なのは「ハイ！せいでーっ！！」

ライオセイザー「全員集合だぞ。」

訓練に打ち込んでいた新人達に、なのはとライオセイザーが集合を掛ける。

フォワードメンバー「」「ハイ！！」「」

既に全身泥だらけになり、肩で息をしながらも、なのはとライオセイザーとイーグルセイザーとビートルセイザーの前に集合する新人4人。

なのは「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト1本！！」

ライオセイザー「まだやれるか？」

イーグルセイザー「俺達がいいが・・・」

ビートルセイザー「どうかな？」

フォワードメンバー「」「ハイ！！」「」

しかし、5人の問い掛けに、力強く答えてみせる。

なのは「それじゃあ、シュートイベーションをやるよ。三人ともお願い。」

ライオセイザー「ああ!!」

なのは「たつくとアドくとケイン君を撃墜するか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰かひとりでも被弾したら、最初からやり直しだよ」

そう説明し、なのははレイジングハートを、ライオセイザーはライオブレイカーを、イーグルセイザーはイーグルブラスターを、ビートルセイザーはビートホークを構えた。

ティアナ「このボロボロ状態でセイザーXのメンバーを撃墜する自身はある？」

スバル「ない!!」

エリオ「同じくです」

ティアナ「じゃあ、なのはさんに何とか1発入れよう!」

キャロ「ハイ!! そうの方が確実です!!」

スバル「よし! 行くよ、エリオ!!」

エリオ「ハイ!! スバルさん!!」

なのは「準備はOKだね」

ライオセイザー「よしスタート!!」

セイザーXはコスモカプセルを取り出した。

ライオセイザー「コスモカプセル・ライオン1!!」

イーグルセイザー「ウルフ5!!」

ビートルセイザー「オックス9!!」

三人はそれぞれの武器にコスモカプセルをセットした。そして・・・

ライオセイザー「ライオフアイヤー!!」

イーグルセイザー「ウルフファイヤー!!」

ビートルセイザー「オックスファイヤー!!」

それぞれの武器から炎のライオン、オオカミ、猛牛が現れ、四人に襲い掛かった。

ティアナ「全員、撤退回避！！2分以内に決めるわよ！！」

スバル、エリオ、キャロ「「おう！！」」

ティアナの号令の元、光となって散開する新人達！！なんとか炎の獣達の攻撃を回避した。

それを見ていたなのはの周りを、ウイングロードが取り囲んだ！

なのは「！！！」

スバル「うおおおおおー！！！！！！」

そして、それに乗ったスバルが、雄叫びを挙げながら、なのはに突撃する。さらに、その反対側のビル窓からも、ティアナが狙いを定めていた。

ビートルセイザー「そう簡単にはいかないよ！！スワントルネード！！！」

ライオセイザー「スタッグサンダー！！」

しかし、それよりも早くビートルセイザーの放った突風の白鳥がスバルに、ライオセイザーの放った雷のクワガタ虫がティアナにあたった。しかし二人は煙のように消えてしまった。

ライオセイザー「シルエットか・・・」

なのは「さすがだね、ティアナ。」

ライオセイザーとなのはがそう言っていると、なのはの背後に、新たなウイングロードが展開した。

スバル「でりゃああああー！！！！！！！！！！」

そして、オプティックハイドで姿を消していたスバルが、真上から重力を味方につけたパンチを叩き込む。

なのは「！！！！！！」

しかしなのはは、バリアを発生させ、それを防ぐ。

スバル「くううううううっ！！！！」

バリアを破ろうと攻撃を続けるスバルだったが……

イーグルセイザー「イーグルタイフーン！！」

イーグルセイザーの放った突風の大鷲がスバルに襲い掛かった。

スバル「うわっ！！！！？」

慌ててローラーブレードのギアをバックに入れて、ウイングロード上を後退し、回避するスバル。

イーグルセイザー「ふむ……悪くない反応だ」

途中、バランスを崩し欠けて、ローラーブレードから火花が散ったが、何とか持ち直す。

そしてイーグルタイフーンはスバルに襲いかかろうとしていた。

ティアナ『スバル、馬鹿！！危ないでしょ！！』

そこへ、念話によるティアナの怒声が飛ぶ。

スバル「う、ゴメン！」

ティアナ『待ってなさい。今、打ち落としてあげるから』

ティアナはそう言って、アンカーガンで大鷲に向けて構える。

そして、狙いを定めて引き金を引く。しかし……ボスツとくぐもった音を漏らし、カートリッジは不発に終る。

ティアナ「へえっ！？」

スバル「うわーっ！っ！！ティアーっ！！援護ーっ！！」

ティアナ「この！肝心な時に！！」

酷使していた為、アンカーガンにはガタが着ていた。慌てて廃棄すると、新しいカートリッジを装填し、改めて発射した。

イーグルセイザー「拓人、ケイン！！俺達はスバルとティアナを落とすぞ！！」

ライオセイザー「分かった。」

セイザーXはスバルを追いかけた。しかし三人は気がつかなかった。ビートルセイザー「そういえばエリオとキャロは？」

ライオセイザー「しまった！！！！あいつらのことを忘れていた！！！！？」

そのころライトニングの二人は

キャロ「我が乞うは、疾風の翼……若き槍騎士に、駆け抜ける力を！！」

爆煙が晴れ、なのはが姿を表した。

レイジングハート『ミッショコンプリート』

なのは「お見事！ミッショコンプリート」

レイジングハート共に、ミッショコンの完了を告げるなのは。

エリオ「ホントですか!？」

なのは「ほら、ちゃんとバリアを抜いて、ジャケットまで通ったよ。」

なのはがそう言って、左胸の上の方を指差す。そこには、微かだが黒くなった直撃の後があった。

ライオセイザー「やれやれしてやられた。」

なのは「じゃあ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

フォワードメンバー「」「「ハイ!」「」「」

なのはは、地面へとゆっくりと降り立つと、バリアジャケットを解除した。

セイザーXも変身を解除した。

なのは「みんな、チーム戦にもだいぶ慣れてきたね」

拓人「本当に成長速度が速いぞ。」

フォワードメンバー「」「「ありがとうございます!」「」「」

なのは「ティアナの指示も筋が通ってきたよ。指揮官訓練、受けてみる?」

アド「君ならいい指揮官になれるぞ。」

ティアナ「い、いえ……あの……戦闘訓練だけで、いっぱいいっぱいです……」

なのはとアドの提案にあわてて答えるティアナだった。その時……

・
フリード「………きゅ?」

キャラ「どうしたの?フリード」

突然、フリードが何かに気づいた。尋ねるキャラにかまわず、周囲をキョロキョロと見回し、

エリオ「そういえば……何かこげくさいような……」

続いてエリオが気づいた。その言葉に一同が周囲を見回し――ふと視線を落としたティアナが声を上げた。

ティアナ「あぁっ！スバル、あんたのローラー！！」

スバル「え……………？……………あぁっ！やば！！？」

見れば、スバルのローラーブーツ、その右足側のフレーム部分が火花を散らしている。どうやら駆動系に組み込まれた電子部品がショートしているようだ。

スバル「あっちゃー、しまった。ムリさせちゃった……」

ケイン「これは大変なことになったね。」

なのは「オーバーヒートかな……後で、メンテナンススタッフに見てもらおうか」

ローラーブーツを抱え、肩を落とすスバルに告げると、なのははティアナへと視線を向け、

拓人「そういえば……ティアナのアンカーガンも、けっこう厳しい？」

ティアナ「はい……だましましたです。」

なのは「みんな、訓練にも慣れてきたし、そろそろ……“実戦用の新デバイス”への切り替えの時期かな……？」

スバル「新……」

ティアナ「デバイス？」

機動六課隊舎前……

取り合えず、なのはとセイザーX、そして新人達は隊舎へと切り上げた。

なのは「じゃあ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まろうか」

フォワードメンバー「」「ハイ！！」「」

なのはの言葉に、元気良く返事をする新人達。

拓人「ん？アレは……」

とその時、拓人が前方から来る1台の車とバイクを見つける。2台

は、そのまま一同の傍まで来ると、停車して車は窓と屋根を開け、オープンカーとなる。そして、運転席からフェイト、助手席からはやてが顔を見せる。そして士もヘルメットをはずして素顔を見せた。キャロ「フェイトさん！八神部隊長！士さん！」

はやて「うん」

スバル「スゴイ！！これ、フェイト隊長の車だったんですか！？」「物珍しげに駆け寄り、フェイトの車を眺める新人達。」

フェイト「そうだよ。地上での移動手段なんだ」

はやて「皆、演習の方はどないや？」

スバル「あー……その……」

ティアナ「頑張ってます」

拓人「皆、順調だぜ。」

アド「そうだな。」

ケイン「うん！！」

士「お前らが言うからには大丈夫そうみたいだな。」

フェイト「エリオ、キャロ、ゴメンね。私は2人の隊長なのに、あんまり見て上げられなくて」

エリオ「あ、いえ、そんな……」

キャロ「大丈夫です」

申し訳なさそうに言うフェイトに、心配ないと返すエリオとキャロ。なのは「たっくん達の言うとおり。4人共良い感じで慣れてきてるよ。何時出勤があっても大丈夫」

はやて「そうかぁ。それは頼もしいな」

なのは「2人は、何処かへお出かけ？」

フェイト「うん、ちょっと6番ポートまで」

はやて「教会本部で、カリムと会談や。夕方には戻るよ」

フェイト「私は昼前には戻るから、お昼は皆で一緒に食べようか？」

拓人達も一緒に」

フォワードメンバー「」「」「ハイ！！」「」「」

元氣良く返事をする新人達。

拓人「いやー俺達もそうしたいけど・・・」

アド「これからデススカルの行動が見えたから調査に向かえとシャーク隊長から連絡があった。」

ケイン「とういことでごめんね。」

そういうと三人はそのまま歩き始めた。

士「俺もこの辺でパトロールへ行つて来るぜ。」

そういうと士はそのまま走り出した。

はやて「たっくんと士君も相変わらずやな。」

なのは「まあ否定はできないけど・・・（ユーノ君・・・どうしているのかな？）」

そして

フェイト「はやて、私達もそろそろ・・・」

はやて「あ、そうやね。ほんならなく、皆」

新人達は、敬礼して2人を見送るのだった。

首都クラナガン・ハイウェイ……

フェイト「聖王教会騎士団魔導騎士で、管理局本局の理事官……

カリム・グラシアさんか……私はお会いした事無いんだけど……」

はやて「ああ、そうやってね」

走る車の中で、会話を繰り返るフェイトとはやて。

フェイト「はやては何時から？」

はやて「うーん……私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばっかの頃のはずやから……8年くらい前かな？」

懐かしそうにしみじみと言うはやて。

フェイト「そっか」

はやて「カリムと私は、信じてるものも立場もやるべき事も全然ちやうんやけど、今回は2人の目的が一致したから……そもそも、六課の立ち上げ。実質的な部分をやってくれたんわ、殆どカリムな

んよ」

フェイト「そうなんだ」

はやて「御蔭で私は、人材集めの方に集中できた」

フェイト「信頼できる上司、って感じ？」

はやて「うゝゝん……仕事や能力は凄いんやけど、あんまり上司って感じはせえへんなあ。どっちかって言うと、お姉ちゃんって感じや」

フェイト「うふふふ……そっか」

はやての言葉に笑いを漏らすフェイト。

はやて「まあ、レリック事件が一段落したら、ちゃんと紹介するよお。きつと気が合うよ、フェイトちゃんもなのはちゃんも」

フェイト「うん、楽しみにしてる」

後編へ続く

第6話「ファースト・アラート」 後編（前書き）

続きます

第6話「ファースト・アラート」 後編

ミッドチルダ北部・ベルカ自治領『聖王教会』・大聖堂……………
同建物内の一室……………

机に腰掛けたロングヘアの金髪の女性が、羽ペンを走らせながら書類整理を行っていた。

シャツハ『騎士カリム。騎士はやてがいらっしゃいました』

そこへ、モニターが開いて、紫色のショートヘアの女性がそう告げた。

カリム「早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい」

書類整理を続けながらモニターの女性にそう言うカリム・グラシア。シャツハ「はい」

カリム「それから、お茶を2つ。ファーストリーフの良い所をミルクとお砂糖付きでね」

シャツハ『畏まりました』

モニターの女性……………シャツハ・ヌエラはそう返事をし、モニターを切った。

カリム「よしっと」

程なくして書類の整理が終る。

するとタイミング良く部屋のドアがノックされた。

カリム「どうぞ」

カリムがそう言うと、案内役に案内されてきたコートを羽織り、フードを付けたはやてが、フードを外しながら入室してきた。

はやて「カリム！ ひさしぶりや」

カリム「はやて、いらっしゃい」

その後、2人は窓際に用意された席へと腰掛け、お茶を嗜みながら話を始めた。

はやて「ゴメンなあ、すっかりご無沙汰してもうてえ」

カリム「気にしないで…………部隊の方は順調みたいね」
はやて「えへ…………カリムの御蔭や」

笑顔でそう言うはやて。

カリム「そういう事にしとくと、色々お願いもし易いかな？」

はやて「アハハ。何や？今日の会って話そうは、お願い方面かあ？」
はやてがそう言うのと、カリムはやや表情を暗くする。

そして、モニターを出現させ操作すると、窓のカーテンが閉められ、部屋が薄暗くなる。

その様子に徒事ではない様子を感じ取り、表情を引き締めるはやて。
カリムは、はやてに良く見える位置に新しいモニターを複数出現させる。

そのモニターには、ガジェットやそれに良く似たメカ、箱状の様な物等がが映し出されていた。

はやて「これ、ガジェット……………新型？」

カリム「今までの？型以外に、新しいのが二種類。戦闘性能はまだ不明だけど…………コレ」

カリムは、映像の1つ…………球体型のガジェットを拡大してみせる。
比較対象として、人間の影絵が映し出されるが、球体型のガジェットはそれよりも大きかった。

カリム「？型はわりと大型ね……………本局には、まだ正式報告はしてないわ。監査役のクロノ提督やシャーク隊長には、触りだけお伝えしたんだけど……………」

カリムは、今度は箱状の様な物の映像を拡大する。

はやて「コレは！？」

カリム「それが、今日の本題。一昨日付けで、ミッドチルダに運び込まれた不審貨物……………」

はやて「レリック……………やね」

カリム「その可能性が高いわ。？型と？型が発見されたのも、昨日からだし……………」

はやて「ガジェット達が、レリックを見つけるまでの予想時間は？」

カリム「調査では、早ければ今日明日」

はやて「せやけど、奇怪しいな……レリックが出てくるのがちょい早い様な」

首を傾げるはやて。今まで、レリックが発見されて、次のレリックが発見されるまでには、一定の期間の様なものがあつた。それが今回は、大幅に短縮されて次のものが出てきていた。

カリム「だから、あつて話したかったの。コレをどう判断すべきか、どう動くべきか」

はやては、カリムの方に向き直る。

カリム「レリック事件も、その後起こるはずの事件も……対処を失敗するわけにはいかないもの」

はやて「……………」

はやては、それを聞くと、目の前にモニターを出現させ操作すると、部屋のカーテンを開け放った。

カリム「？……………はやて？」

はやて「まあ……………何があつても、きっと大丈夫。カリムが力を貸してくれた御蔭で、部隊はもう何時でも動かせる。即戦力の隊長達は勿論、新人フォワード達も実戦可能。それに曉さん達ボウケンジャーやたつくん達セイザーX、土君や良ちゃんたちもいる。」

カリムの不安を払拭する様に言うはやて。

はやて「予想外の事態にも、ちゃんと対応できる下地が出来てる………そやから、大丈夫」

機動六課隊舎・デバイス整備室……………

スバル「うわぁー！これが！」

ティアナ「アタシ達の新デバイス、ですか……………」

そう言うスバルとティアナの目の前には、青色の結晶の形をしているデバイスと、銀色に赤いラインが入ったカード状のデバイスが浮かんでいた。

シャーリー「そうでーす！設計主任あたし！協力、なのはさん、フ

エイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長！そして牧野先生！」

2人の後ろにいたシャーリーが嬉しそうに言う。更にその後ろでは、背を向ける様に立っていたエリオとキャロが、同じく目の前に浮かんでいるデバイスを眺めていた。

エリオ「ストラダーとケリユケイオンは、変化無しかな？」

キャロ「うん……そうなのかな……」

リイン「違いまあす！」

キバット「変化無しは外見だけだぜ！！」

そう言う二人の頭上にリインとキバットが下りてくる。

キャロ「リインさん！！」

エリオ「キバット！！」

リイン「はいですー！二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、官職に慣れてもらうために、基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

エリオ「あ……あれで最低限！？」

キャロ「ホントに？」

リインの言葉に、驚く二人。

リイン「皆が預かる事になる4機は、六課の前線メンバーと、メカニクススタッフの技術の粹を集めて完成させた最新型。更に特捜機動隊の敵に対する様々な戦闘経験データが内臓されています。」

キバット「それにエリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた、文句なしに最高の機体だぜ！！」

リインとキバットはそう言うのと、新人4人に囲まれたの中心に浮かび、周りにデバイスを呼び寄せる。

リイン「この子達は皆、生まれたばかりですが、色々な人の願いや思いが込められていて、一杯時間を掛けてやっと完成したです」

そして、デバイス達を持ち主の元へと送る。

リイン「只の道具や武器と思わないで大切に………だけど性能の限界まで、思いっきり使ってあげて欲しいです！」

キバット「俺様見たいと思えばいいぜ!!」

シャーリー「この子達もね、きっとそれを望んでるから」

なのは「ゴメンゴメン、お待たせ!!」

良太郎「今、来たよ。」

渡「遅れてごめん!!」

リインとキバットに続けて、シャーリーがそう言った時、なのはと良太郎とモモタロスとウラタロスとキンタロスとリュウタロスとコハナと渡とこなたとかがみとつかさとみゆきが部屋へと入って来た。リイン「なのはさくん!」

キバット「渡!!」

シャーリー「ナイスタイミングです。ちょうどこれから、機能説明をしようかと」

スバル「ん?」

モモタロス「どうしたんだ!!?」

スバル「その声ってどっかで聞いたような・・・」

ティアナ「もしかして!!」

スバルとティアナは思い出した。試験会場で出会った仮面ライダー達のことを

良太郎「じつは僕達なんだよ。」

渡「へへ・・・」

スバル「そうだったんですか。」

モモタロス「まあ・・・よろしくな。ハチマキ女にミカン頭女!!」

スバル「ハチマキ女か・・・」

ティアナ「ちよっと!!ミカン頭女ってどういう意味なのよ!!!?」

ティアナはモモタロスに文句を言った。

モモタロス「頭の色のことを言ってるに決まっているだろ!!このミカン女!!」

ティアナ「アンタ!!いい加減にしなさいよ!!」

ウラタロス「ごめんね。先輩は脳細胞が一つなくしているからね。」

モモタロス「なんだと!!? やんのかコラ!!!」

モモタロスとウラタロスは喧嘩になりそうになるが
かがみ、コハナ「やめなさい!!!」

再びかがみとコハナの制裁パンチによって止められた。

キンタロス「相変わらずやな、モモの字にカメの字は!!」

リュウタロス「そうだね。」

つかさ「あはは・・・」

こなた「とりあえず、なのはさん。続きをどうぞ。」

なのは「そうだね。もうすぐに使える状態なんだよね?」

渡「ちようど、その説明をしようとしているところだね。」

リイン「ハイ!」

リインが答えると、シャーリーは4人の新デバイスの詳細データが
映ったモニターを出現させる。

シャーリー「まず……その子達皆、何段階かに分けて、出力リミ
ッターを掛けてるのね。1番最初の段階だと、そんなにビックリす
る程のパワーが出るわけじゃないから……まずは、それで扱いを
覚えていって」

なのは「で、各自が今の出力を扱い切れる様になったら、私やフェ
イト隊長、リインやシャーリーの判断で解除していくから」

リイン「丁度、一緒にレベルアップしていく様な感じですね」

ティアナ「あ……出力リミッターって言うと、なのはさん達にも
掛かってますよね」

ティアナが、ふと思い出したかの様に言った。

なのは「うん……私達は、デバイスだけではなくて本人にもだけ
どね」

スバル「えっ?」

エリオ「リミッターが、ですか?」

なのはの言葉に、新人達が驚きを示す。

なのは「能力限定って言ってね、うちの隊長と副隊長は皆だよ。私
とフェイト隊長、シグナム副隊長とヴィータ副隊長……」

リイン「はやてちゃんもですね」

なのは「うん」

キャロ「え〜と……………」

スバル「うん?……………」

どういう事が良く分からず、首を傾げる新人達。

シャーリー「ほら、部隊ごとに保有できる、魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない」

そこへ、シャーリーが捕捉説明する。

スバル「ああ、そうですね……………」

リイン「1つの部隊で、沢山の優秀な魔導師を保有した場合は、そこに上手く収まる様、魔力の出力リミッターを掛けるですよ」

シャーリー「まあ、裏技っちゃあ、裏技なんだけどね」

なのは「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達は大体2ランクダウンかな?」

ティアナ「4つ……………八神部隊長って、SSランクの筈だから……………」

エリオ「Aランクまで落としてるんですか?」

リイン「はやてちゃんも色々と苦労してるですよ」

リインが、ホント苦労してるんですよと言った感じで言う。

スバル「なのはさんは?」

なのは「私は、元々S+だったから、2・5ランクダウンでAAだねだからもうすぐ、ひとりでみんなの相手するのは辛くなってるかな?」

リイン「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役、クロノ提督の許可がないと、リミッター解除はできないですし、許可は、めったなことでは出せないそうです。」

なのは「まあ、その話は心の片隅にでも置いといて。今は皆のデバイスの事」

そう言ってなのはは、話をデバイスの事に戻す。

シャーリー「新型も、皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても、違和感は無いと思うんだけどね」

なのは「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

シャーリー「遠隔調整も出来ますから、手間は殆ど掛からないと思いますよ」

なのは「ふう〜、便利だよね〜、最近は」

技術の進歩に感嘆のタメ息を漏らしながら言うのはだった。

リン「便利です」

こなた「便利だよね。」

シャーリー「あ！スバルの方は、リボルバーナックルとのシンクロ機能も、上手く設定できてるからね」

スバル「ホントですか！？」

シャーリー「持ち運びが楽になる様に、収納と瞬間装着の機能も付けたいた」

スバル「うはは、ありがとうございます」

笑顔でシャーリーに感謝するスバルだった。

首都クラナガン・ハイウェイ……

はやてを送り届けたフェイトの車は、帰り道に着いていた。ちょうど士も一緒であった。

フェイト「うん。はやてはもう、向こうに着いてる頃だと思うよ」

グリフィス「ハイ！お疲れ様です」

モニターのグリフィスと話しながら、車を走らせるフェイト。すると士が

士「俺はこのまま走っていくぜ。」

フェイト「私もこの後、公安地区の捜査部に寄って行こうと思うんだけど……そっちは何か、急ぎの用事とか有るかな？」

グリフィス「いえ、こちらは大丈夫です。副隊長御2人は交替部隊と一緒に、ボウケンジャーとセイザーXの方々もそれぞれで出撃中

ですが、なのはさんが隊舎にいらっしゃいますので」
フェイト「そう……………」

士「なら大丈夫か。」

と、その時……!

『ALERT』と映し出された赤いモニターが出現し、警報を鳴らした……!

フェイト「……!」

士「いきなりかよ……!」

機動六課隊舎・デバイス整備室……………

隊舎の方でも、壁に付けられているモニターに、同じ文字が赤く点滅し、警報が鳴り響いていた。

スバル「……!? このアラートって……!」

エリオ「1級警戒態勢……!」

モモタロス「やべえことになってきたぞ……!」

こなた「そうだね。」

なのは「グリフィスくん……!」

なのはの声に應える様に、モニターの1つにグリフィスの姿が映し出される。

グリフィス「ハイ! 教会本部から出動要請です!」

と今度は、その隣のモニターにはやての姿が映し出される。

はやて「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君! こちらはやて」

そのころボウケンジャーは

ボウケンレッド「教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった?」

グリフィス「ハイ! 場所はエーリム山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中です」

出動していたボウケンジャー達も、グリフィスから通信で、レリック発見の報告を受けていた。

ボウケンブラック「オイオイ！移動中だって！？

ボウケンピンク「まさかりニアレールが乗っ取られたって言うんですか！！？」

グリフィス「…………そのまさかです。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われています。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出てくるかもしれないそれからネガティブやスーパード大ショックの反応もあります！！」

ボウケンブルー「ただでさえガジェットだけで大変なのに。」

ボウケンイエロー「なのはちゃんやフェイトちゃんやフォワードメンバーだけで大丈夫かな？」

ボウケンシルバー「明石！！」

ボウケンレッド「念のため、俺達もでる！！」

グリフィス「お願いします。」

そういうと通信をきった。

ボウケンレッド「レリックを確保及び敵の撲滅行くぞ！！アタック！！！」

一方、セイザーXも

レミー「聞いているとおりよ！！」

ライオセイザー「ああ、俺達も行くぞ！！」

レミー「うん！！」

イーグルセイザー「ああ、行くぞ、ゴールド！！」

ゴールド「OK！！艦長！！」

ビートルセイザー「二人もいい？」

アイン「もちろん！！」

ツヴァイン「出撃大丈夫です！！」

そのころ

ガジャ「ついに辿り着いたぞ。プレシヤスのあるところへ！！レリ

ックはこの私がいただく!!!そしてゴードム文明は復興されるのだ!!!」

ガジャたち、ゴードム文明がやってきた。

バハムート「リユオン様、こちらです。」

リユオン「そのリニアモールにレリックがあるのだな!!!レリックは我々ジャリユウ族のものだ!!!」

創造主リユオン率いるジャリユウ一族までやってきた。

そしてリニアモールの中にはイマジンやファンガイアも存在していた。そこには二体の怪人が指揮していた。スーパードシヨッカー・イマジン軍の隊長・アリゲーターイマジンとファンガイア軍の隊長・ビートルファンガイアである。

アリゲーターイマジン「ちっ、ジャーク將軍様の命令とはいえなぜ俺が貴様のような奴と協力しなければならないのだ!!!」

ビートルファンガイア「ふっ、俺はかまわないぞ。我がファンガイア軍の実力を奴らに見せることができるからな。」

アリゲーターイマジン「ばか者!!!それはそっちの台詞だ!!!まあいい貴様達は俺の指揮に従ってもらうぞ。」

ビートルファンガイア「いいだろう。」

そのころ

はやてからの通信で

はやて「いきなりハードな初出動や——なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか?」

フェイト「私はいつでも」

なのは「私も!」

フェイトとなのはがうなずくと、はやてはスバル達へと視線を向け、はやて「スバル、ティア、エリオ、キャロ!みんなもオツケーか!」

『フォワードメンバー』はい!!!』

良太郎「もちろん、僕達もイマジンが出てきたらチームデンライナーの仕事だし。」

渡「僕もファンガイアをなんとかしないと・・・」
こなた「私達もいいよ。」

モモタロス「俺達はいつでもいいぜ!!」

はやて「よし……ええお返事や。シフトはA-3。グリフィス君は隊舎での指揮。リインは現場管制!なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮!良ちゃん、渡君、こなたちゃんはイマジンとファンガイアの駆除!!ほんなら……」

言って、はやては映像の向こうで立ち上がり、

はやて「機動六課、フォワード部隊——出動!!」

全員『はいっ!!』

そして

六課ヘリ・ストームライダー内……

なのは「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

初出撃となる新人達を前に、そう言うなのは。

ティアナ「ハイ……」

スバル「頑張ります!」

やや気後れしてる感じのティアナに対して、スバルが意気込み良しと言った感じで返事をする。

リイン「エリオとキャロ、それにフリードもしっかりですよ!!」

今度は、なのはの隣に浮いていたリインがそう言う。

エリオ「ハイ!」

キャロ「ハイ!」

フリード「きゅう〜」

なのは「危なくなったら、私やフェイト隊長、リイン、仮面ライダーがちゃんとフォローするから、それにボウケンジャーやセイザーXの皆も来てくれるからおっかなびっくりじゃなくて、思いつき

やってみよう!!」

そう告げるなのはだったが――

フリード「きゅ〜?」

エリオ「……………?」

フリードが不安げにしているのに気づき――エリオはふと、となりのキャラがじっとうつむいているのに気づいた。

エリオ「大丈夫?」

キャラ「あ、うん……ごめんなさい。大丈夫……」

気遣い、尋ねるエリオに、キャラは笑顔で答えた。

一方、スバルとティアナは……

ティアナ「……………」

無言で自分の新しいデバイスを見つめるティアナ。

スバル「初めましてで、いきなりになっちゃったけど、一緒に頑張ろうね……相棒」

そして、スバルは新デバイスに向かって、静かにそう語り掛けている。

そのころリニアモーターでは

ショッカー戦闘員「イー!!機動六課とボウケンジャー、セイザー

X、ネガティブがこちらに向かっています!!」

ビートルファンガイア「来たか……」

アリゲーターイマジン「返り討ちにしてやる!!」

スーパー大ショッカーも動き出した。

続く

第6話「ファースト・アラート」 後編（後書き）

次回予告

なのは「大丈夫、そんなに緊張しなくても。離れてても、通信でつながってる――ひとりじゃないから。」

スバル「お前はね、あたしと一緒に走るために、生まれてきたんだよ」

キャロ「フリード、不自由な思いをさせててごめん。私：ちゃんと制御するから」

ディケイド「こいつらは弱いけどお前らよりは強いぜ！！」

第7話「星と雷」

すべてを破壊し、すべてを繋げ！！

第7話「星と雷」前編（前書き）

遅れてすみませんでした。しばらくは不定期更新となります。

キャロ「私の新しい居場所……大好きな人と、優しい人がいる場所……だけど……何処かでまだ迷ってる……きつと……自分の事が恐いから……一緒に戦うパートナーと、一生懸命な先輩達と、きつと……私と同じ思いを持った優しい子……迷ってられない……決めたから、自分がこれから進む道……魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDERS☆StrikerS☆……
……はじまります。」

第7話「星と雷」前編

キャロの回想

テントの中で、老人と老婆の前にフリードを抱えて座っているキャロ。

老人「アルザスの竜召喚部族、『ル・ルシエ一族』の末裔キャロよ」

老婆「わずか六歳にして白銀の竜を従え、黒き火竜の加護を受けた、お前は真に素晴らしき竜召喚よ……」

老人「じゃが、強すぎる力は災いと争いしか生まぬ」

キャロ「!？」

老婆「すまん……お前をこれ以上、この里へ置くわけにはいかんのじゃ……」

そう言われて、キャロは里を追放させた。……

キャロ（竜召喚は危険な力……人を傷つける恐い力……）

キャロ「きゃあ!!」

なのは「キャロ、どうしたの？」

キャロ「いえ……大丈夫です。」

アルト「問題の貨物車両、速度70を維持！依然進行中です!!」
ルキノ「重要貨物室の突破は、まだされていないようですが……」
グリフィス「時間の問題、か……!」

機動六課指令室——アルトとルキノからの報告に、グリフィスはメインモニタに映し出された貨物列車へと視線を向けた。内部に積まれた“レリック”を狙ったガジェット群とゴードムとジャリユウ族とスーパー大ショッカーの襲撃によって、列車はコントロールを奪われて暴走。“レリック”を奪われるわけにはいかないし、リニアルールも止めなくてはならない。

部隊長であるはやてはこちらに向かっている最中だ。その間は自分が指揮をこなさなければならぬ――グリフィスが気を引き締めた、その時、再び警報が鳴り響いた。

シャーリー「アルト、ルキノ！広域スキャン！サーチャー、空へ！すぐさまシャリオが動いた。彼女の指示で監視の目は空へと向けられ――」

アルト「ガジェット反応！？空から！？」

ルキノ「航空型、現地観測隊を捕捉！」

アルト「それにあれば――！」

ルキノ「宇宙海賊デスカルの戦艦！！？」

そこに表示されたのは、カリムからはやてに報告のあったばかりの航空型ガジェット“ガジェット？型”とセイザーXの敵である宇宙海賊デスカルの戦艦の反応だった。驚きながらもアルトとルキノが報告した。

首都クラナガン・ハイウェイ……

一方、フェイトと士も駐車場へと差し掛かっていた。

フェイト「こちらフェイト。グリフィス、こっちは今、パーキングに到着。車停めて現場に向かうから、飛行許可をお願い！」

士「俺もこのまま現場に向かうぜ！！」

グリフィス『了解！市街地個人飛行、承認します！』

グリフィスへ、そう連絡すると、フェイトと士は駐車場へと車とバイクを停めるだった。

一方セイザーXも

ライオセイザー「レミー、俺達も出る！！あいつらをほっとくわけにはいかないからな。」

レミー「うん！！」

三体の戦艦も急高速で進み始めた。

ストームレイダー内……

なのは「ヴァイスくん！私も出るよ！ガジェットのほうはフェイト隊長と2人で、空を抑える。」

ヴァイス「ウッス！なのはさん、お願いします」

ストーム『メインハッチ、オープン！』

それを聞いたヴァイスは、後部のメインハッチをオープンさせる。

なのは「じゃあ、ちよつと出てくるけど、皆も頑張ってズバツとやっつけちゃおう！！」

新人達の方を見ながらそう言うなのは。

スバル、ティアナ、エリオ「「ハイ！！」」

それにスバル、ティアナ、エリオは、元気良く返事を返す。

キャロ「ハイ……」

しかし、キャロだけが一瞬返事が遅れ、緊張している様子が残っていた。

なのは「キャロ……大丈夫。そんなに緊張しなくても……」

そんなキャロに近づく、なのはは優しくその頬に手を触れた。

なのは「離れてても、通信で繋がっている。一人じゃないから、ピッチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、皆を守ってあげられる優しくて強い力なんだから……ね？」

キャロ「……………」

気恥ずかしさに頬を染めながらも、キャロはなのはの話に聞き入っていた。

パーキングエリア……

フェイトは、車から降りると、走りながらバルディッシュ・アサルトを取り出す。士もバイクから降りるとディケイドライバーを取り出した。

バルディッシュ『ゲットセット！』

フェイト「うん！」

バルディッシュから呼び掛けに短く答えると、フェイトは金色の光

に包まれた。

フェイト「バルディッシュ・アサルト！セット・アップ！！」

バルディッシュ『セット・アップ！』

そして、セット・アップして、バリアジャケットを身に纏った戦闘形態となった。

フェイト「行くよ、バルディッシュ！！」

バルディッシュ『イエス、サー！！』

そして、そのまま空へと舞い上がる。

フェイト「ライトニング01！フェイト・テストロッサ・ハラオウン！行きます！！」

現場目掛けて、一直線に飛ぶフェイトだった。そして・

士「変身！！」

『カメンライド・ディケイド！！』

士もディケイドに変身した。

ディケイド「俺も現場に向かうぜ。」

『アタックライド・フライ！！』

ディケイドも背中から翼が生えると、空を飛び。現場に向かった。

再び、ストームライダー内……

なのはが、開いた後部メインハッチから飛び降りた！

レイジングハート『スタンバイ、レディ！！』

なのは「レイジングハート、セエーローット、アップ！！」

そして、セット・アップし、バリアジャケットを身に纏うと、宙を舞った。

レイジングハート『アクセルフィン！！』

なのは「スターズ01！！高町なのは！行きます！！」

桜色の羽根を散らしながら、現場へと飛んだ！

一方、デンライナーでは

良太郎「いよいよ本当の戦いだよね。」

こなた「そうだね。」

渡「スーパー大ショッカーとの戦いが始まるんだね。」

コハナ「とりあえず私達はスバルたちと一緒にレリックを回収しながらイマジンやファンガイアを倒すこと。」

モモタロス「だったら簡単じゃねえか!!」

キバット「そうだな。」

そして、

キバット「キバって行くぜ!!!」

キバットは渡につかまり渡の手にかみついた

キバット「ガブ!!!」

渡の顔に模様みたいなものが付いて腰にベルトがついた。

渡「変身!!!」

渡はキバに変身した。

良太郎「変身!!!」

『ソードフォーム!!!』

良太郎は電王Sへと変身した。

電王S「俺、参上!!!」

そして、こなた、かがみ、つかさ、みゆきもベルトを腰にセットした。

こなた、かがみ、つかさ、みゆき「変身!!!」

四人はそれぞれの仮面ライダーに変身した。こなたはキツネをモチーフした仮面ライダースターに、かがみはウサギをモチーフした仮面ライダーパープルに、つかさはイヌをモチーフした仮面ライダーフェアリーに、みゆきは牛をモチーフした仮面ライダーホワイティスに変身した。

電王S「今日は最初から本気で行くぜ!!!」

ウラタロス「僕達は先輩達のサポートしなきゃね。」

キンタロス「そやな!!!」

リュウタロス「よっし!!!行くよ!!!」

残された新人達は、リインから任務の説明を受けていた。

リイン「任務は3つ。ガジェットを逃走させず、全機破壊する事。ネガティブやスーパードシヨッカーをボウケンジャーや仮面ライダーと共に追いつ返すこと。そして、レリックを安全に確保する事」

リインは、そう言うのと、作戦を図式化したモニターを出現させる。

リイン「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊、2人ずつのコンビで、ガジェットを破壊しながら、車両の前後から中央に向かうです。それから怪人達戦うときはボウケンジャーか仮面ライダーと協力すること。」

図式の車両中央部分が発光する。

リイン「レリックはココ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニング……先に到達した方が、レリックを確保するですよ」

フォワードメンバー「」「ハイ!」「」

リイン「では……」

新人達の返事を聞くと、リインは騎士甲冑を纏った姿となる。

リイン「私も現場に下りて、管制を担当するです!」

一方、なのはとフェイトは……

ロングアーチ『スターズ01、ライトニング01、エンゲージ!!』

ロングアーチからの管制を受け、空中のガジェット軍と戦闘に突入しようとしていた。

フェイト「こっちの空域は、2人で抑える!! 士は新人達方、フォローお願い!」

ディケイド「了解!!」

ディケイドはスバルのほうへと向かった。

なのは「同じ空は久しぶりだね、フェイトちゃん」

フェイト『うん、なのは』

2人がそう話し合っていると、空中戦型ガジェット……ガジェットドローン? 型が迫り来る!

なのは、フェイト「!」

2人は分散し、各個撃破に掛かる。

なのはは、ガジェットからの雨の様な攻撃をかわしながら、ショートバスターで一閃する！

更に、それを回避したガジェットを、アクセルシューターで蜂の巣にして撃墜する！

一方、フェイトの方はハーケンフォームにしたバルディッシュから、ハーケンセイバーを飛ばし、ガジェット2機を撃墜！他のガジェット軍も、高速接近戦で仕留めていく！

中編へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2384k/>

魔法少女リリカルなのはRANGERS☆RIDER☆StrikerS☆

2010年11月1日08時47分発行